

---

# 傑点×欠点

長山泰士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傑点×欠点

### 【Nコード】

N5983C

### 【作者名】

長山泰士

### 【あらすじ】

某有名大学に通う学生、高橋信幸は、おとなしい性格で勉強も人並みにできていた。人見知りのためか、友達は多くなかったが、親友とも呼べる仲間や直子という彼女もいた。そんな時、高橋の人生は、親友である伊藤のある事件をきっかけに、徐々に崩れ始める。徐々に崩れていく生活の中で、高橋は直子と付き合うことの意味、伊藤への感情などについて深く考えるようになる。そして、最後に高橋の人生を決定付けるのは、伊藤からの手紙である。答えを求めていた高橋にとって、その手紙は正に、「答え」そのものだったの

だ。

## 第一・二話

一、

落ち葉を踏みしめながら山道を登っていく。今日は、やけに落ち葉を踏みしめるミシミシという音が、耳に心地よく感じられる。高橋は、何か考え事があると、名も知れぬこの山へと足を運んでいた。紅葉も終わり、葉の落ちた樹木は、どこか寂しげな雰囲気を出しつつ、高橋を歓迎しているかのようにも見える。そして、高橋は、それに誘われるかのように足を運んでいた。半時も歩くと視界が開け、目前に錆のこびり付いた、いかにも古そうな展望台が見えた。高橋は、その展望台へと上り、背筋を伸ばすと、ため息をひとつついた。吐息は白くなつたかと思うと、どこかへと消えていった。しばらく手すりにもたれ掛かり、沈黙だけが続く。そして、冬を告げるような冷たい風が、高橋の胃をさすのだった。

高橋信幸は、某有名大学に通う学生である。成績は普通で、友人は多く無いが、親友とも呼べる人が幾人かいた。気の合う者同士で騒ぎ、気の合わない者とは一線を引く、それが高橋の考えであり、また、それが彼を普通とは一風変わった人間だという印象を周囲に与えた。かと言って不快な印象は無く、むしろ、そのさっぱりとした印象から周囲の好意が伺えた。そのせいか、高橋には直子という恋人がおり、度々食事に出掛けては、たわいも無いことを話し、ふたりで楽しんでいた。

「直子はどう？」

「どうって、なにが？」

「大学だよ。最近講義が退屈だね。」

「そうね、私も同じよ。というか、みんなそうなんじゃないかな。大学生活にも慣れてきて、まんねりしてきているんだよ。最近は、試験やレポートも多いし、でも、大学での生活なんてそんなに力む

ものじゃないと思うよ。とりあえず、卒業して、就職できればいいんだよ。若いうちしかできないこともたくさんあるし、今は楽しもうよ。」

「それもそうだな。じゃあ今度の土曜日にどこか出掛けようか？」

「ごめん、今度の土曜はバイト入ってる。日曜日は？」

「日曜は、友達とレポート書かなくちゃいけないから無理だな。まあ、また今度にしよう。」

「うん。」直子は軽く笑みを見せ、頷いた。

その時、レストランの柱時計は、夜の八時をまわっていた。高橋たちの他には、若いカップルが一組と年を取った男性が一人いるだけだった。若いカップルは、なにやらもめており、その一角だけ空気がよどんでいるように見えた。一方、それとはお構いなしに、老人は新聞を片手に、コーヒーを飲んでいた。古い柱時計、いい具合につやの出ているテーブルや椅子、人の歩く場所が模様のようにすれている床、どれをとってみても綺麗とは言いが、店全体になにやら懐かしい空気を漂わせていた。

「そろそろ出ようか。」

「うん。」

ふたりが若いカップルの脇を通り過ぎようとした時、微かではあるが、若い男が女に別れようと言ったのが聞こえた。高橋が勘定を終え、店を出ようとした時、ふと女の方を見ると、顔をテーブルに伏せて泣いていた。男の表情を伺うと、悲しいというよりは、どこか自信に満ち溢れているようにも取れた。いつか別れる日はきっと来る。そう思いつつも、自分自身に当てはめてみる勇氣はなかった。「なんか、あのふたり気まずそうだったね。女の人泣いてたよ。かわいそうだったな。」

かわいそうなのは男の方、きっと女に振り回されていたのだ。そうでもなければ、あんなにいい表情をしているはずがない。そう直子に言おうとしたが、高橋は、そうだねと言って流した。男と女では、元来考え方が違うのだ、それは認める。けれども、それが原因で自

分たちまであの二人のようにはならない、高橋はそう思った。

「今日はありがとう。私、明日早いから、今日はこれで帰るね。」

「了解、今日も家まで送ろうか？」

「ううん、まだ九時前だし、たまにはひとりで帰るよ。いつもいつも悪いし、御飯もおごつて貰っちゃったし。それじゃ、またね。レポート頑張つて。」

「分かった、直子も気をつけてね。」

帰宅途中、高橋は少し遠回りをし、河川敷の堤防を自転車を押して帰った。川はコンクリートで固められ、ペットボトルなどのごみが生き物のように浮いていた。また、その流れは不気味なくらいにゆっくりとしており、波一つ無く穏やかであった。河川敷には、これといって大きな木はなく、コンクリートのない場所にひっそりとすすきや背丈の低い雑草などの植物が生えていた。こんな場所では季節が感じられない。一年中同じような景色ではないか。本来、人間は川と共に生きてきた。メソポタミア文明など、四大文明は大河があつたが故に生まれたのではないか。この川は人間の手により、こんな姿になつてしまった。けれども、その裏には反抗することなく、穏やかに流れている姿がある。川は静かである。その力強くも健気な姿が、高橋の感情を動かす静へと誘ふのだった。

ふと気づくと、川辺には、レストランで見たようなカップルが肩を寄せ合い、座っていた。なぜこんなところで、と思いつつ、「たまにはひとりで」、直子の言つたこの言葉がやけに頭に残つた。今まで、ずっと家まで送つていたのに、今日はどうしたのだろうか。レストランでのこともあり、なんだか直子が遠くに行つてしまうような気分になつた。

自分だつてひとりになりたい時だつてある。しかも、今夜は、何も気まづくなるようなことはなかつたはずだ。自分は、生まれつき考えすぎてしまう癖がある。きっと、今回もその類だろう。あまり深く考えないことだ。そう自分に言い聞かせ、自転車にまたがり冷たい夜の風を切り裂いた。そして、家に着くとその日は何もせず

に寝てしまった。

二、

高橋が目覚めたのは、もう正午になろうかという頃だった。ベットから降りると、冷蔵庫から一〇〇%のオレンジジュースを取り出し、飲むというよりは口の中へと流し込んだ。これを行うことにより、気だるい体に気を吹き込むのだ。高橋はベットの上に座り、テレビのスイッチをつけた。今日は、土曜日ということもあって、昼前からバラエティ番組が多く、ブラウン管からは笑いが絶えなかった。しかし、どれも大した事は無く、もうさめざめとしていた。そのため、高橋は昼前の二ニュース番組に切り替えた。ニュースを報道していたのは、この時間帯によく出ている少し細身の中年男性だった。「昨夜未明、東京都世田谷区で都内の中学校に通う女子生徒が、自宅の部屋で首吊り自殺をしました。原因は、残された遺書から、いじめであつたと思われます。」最近、こんなニュースが増えたなどニュースを聞くたびに思った。少し前までは、友達や親族を殺すといった事件が世間をにぎわしていた。けれども、最近では学生の自殺が多くなってきた。死ぬ気になれば、何でもできるのではないか？いじめが原因なら、いじめているやつをぎゃふんと言わせればいいではないか。はたして、それができないから自殺へと走るのだろうか。実のところ、理解しようとしても、高橋には理解しがたかった。そして、理解できないもどかしさと内容の退屈さから、テレビを消してしまった。

今日は土曜日である。直子はバイトであり、レポートをするのは明日と決めているので、特にすることは無い。高橋は、ベットに横たわり、昨日のことを考えた。昨日、俺はなぜ直子が遠くにいつてしまうような感覚になったのだろう。レストランでのカップルのせいかだろうか？それとも、寒くなってきた季節が、俺の心を感傷的にしているのだろうか？今考えてみても、まったく分からなかった。

けれども、今考えてみると、昨日のような心配はいつさいなかった。今思うと、あんなに考えていた自分がばからしく思えてきた。

高橋の部屋は六畳ほどであり、大学生としては、まあ一般的である。掃除はほとんどしないままであったが、余計な物がないので意外とさっぱりしていた。建物自体も大きな道路から離れているため、昼間でも静かだった。そのためか、ひとりでこの部屋にいと、どこことなく寂しい気持ちになってくるのだった。その日も例外ではなく、高橋はひとり寂しい気持ちになってきた。「よし、とりあえず外に行こう。」そう心の中で自分を奮い立たせ、携帯と財布を持ち、木枯らしの吹き荒れる世界へと出だしていった。

外は意外と寒かった。そのため、高橋はラーメン屋に入った。店は、熱気でむんむんしており、席もほぼ満席といった状況で、外の凍える世界とはまったく別世界であった。高橋は、カウンターに空いている席を見つけると、そこに座り、ラーメンとチャーハンのセットをたのんだ。店長と思われる人物は、料理人というよりはプロレスラーといった感じで、筋骨隆々の肉体に濃いひげをはやしていた。周りで働くアルバイトらしき人たちは、高校生か大学生なのだろう、顔にはまだ幼さが残っている。そうこうしている内に、高橋の前に目的の品が登場した。透き通ったスープ、金色に輝くチャーハン、いずれからも湯気がとめどなく立ち上がり、いい香りが高橋の空腹を刺激した。ちぢれた麵をすすり、スープを口に含まると、凍ったからだが解凍されていくような気分だった。量は意外と多くなかった。けれども、高橋の空腹を抑えるのには十分であった。食べ終わると鼻をかみ、勘定を終えると速やかに店を後にした。それから、古本屋に行こうと思い立った。

高橋は本を読むのが好きであった。けれども、ただ読むのではなく、彼なりのこだわりがあった。高橋は、まず図書館で本を借りたことがなく、ほとんどの本は本屋で買っていた。なにか他人の物を借りているという責任観と、自分の物ではないという所有力のなさ、がそうさせていたのだらう。しかし、いつまでも新しい本を買って



いたのでは、財布が底をついてしまう。そのため、よく古本屋に行くようになったのである。まあ、本屋にとっては喜ばしいことであるから、以上のことはよしとしておこう。

その後、高橋は古本屋の中をぶらつき、目ぼしい本を見つけては所々読み、また、目ぼしい本を見つけては読み、を繰り返していた。しばらくすると足が疲れてきたので、近くにあったパイプ椅子に腰掛けた。この古本屋は、日本でも一級に大きいものだそうで、江戸・明治・大正の頃の書籍や巻物など、大学の教授しか読まないようなものまでたくさんあった。また、本だけでなく、レコードやCD、昔のポスターまでもが売られていた。それらの品数が店の大きさを暗に物語っているのだ。言い換えれば、ここは本好きの天国であり、楽園である。高橋はここに来るたび、家の近くにこの店があることを幸福に思うのだった。

本を物色して三時間ほどたっただろうか、高橋は結局なにも買わずに古本屋を出た。そして、家への帰り道にスーパーに立ち寄り、今晚のおかずの材料を買い、帰路についた。

戸を開けると、部屋のこもった臭いと、夕方なのに薄暗い玄関が高橋の帰りを待っていた。食品を冷蔵庫に入れると、音楽をかけてベットに横になった。高橋の疲れを受け止めるのはいつもこのベットである。晩飯までにはまだ時間がある、一眠りしよう。そうして、高橋が次に意識を取り戻したのは、夜の八時過ぎであった。

### 第三話

三、

次の日、高橋は目覚めが良かった。今日は友人とレポートを書くということもあり、いつもより早めに起きてオレンジジュースを飲んでいた。友達との待ち合わせ場所は、大学の図書館であり、それまでにはまだ時間が合った。ぼーっとしていても何もならない、そう思った高橋はシャワーを浴びに浴室へと向かった。部屋の中でも感じる朝のひんやりとした空気に、冷やされた高橋の体を流れていくお湯が心地よかった。風呂から出て髪を乾かしていると、高橋の携帯にメールが入ってきた。乾かし終えて、髪をおおざっぱに整えると、メールを開いてみた。メールは、これから一緒にレポートをやる友人からだった。内容は、集合時間を一時間ほど遅らしてもらえないかといったもので、特に急いでいるわけでもなかったもので、「了解。」とだけ返事を返した。

そして、一通り準備を終えると、先に図書館に行くことにした。図書館は、日曜日ということもあり、人はそれほど多くはなかったけれども、試験が近いのだろうか、机に向かい勉強をしている学生の姿が目立った。高橋は、そういった人々に感心しつつ、自分は壁際の椅子に座り、家から持ってきた本を読み始めた。半時ほど読んでいると、なんだか眠たくなってきた。周りを見ると、先ほどまでガリガリ勉強をしていた学生の幾人かも、机にうつ伏せになっていた。それを見ると、高橋もなんだか安心し、眠気に任せてうとうとと寝入ってしまった。

ふと気づくと、高橋は自分の肩が強く揺さぶられるのに気づいた。「おう、そろそろ起きろよ。レポートの時間だぞ。」

高橋は、すぐには状況をつかめなかったが、意識がはっきりしてくると友人の伊藤であることに気づいた。

「おう、もうそんな時間か。ついつい寝ちゃったよ。」

「そうらしいな、あんまり気持ちよさそうに寝てるから、起こそうか迷ったけど、いつ起きるか分からないから、とりあえず起こしてみた。」

「ありがとう。」

「じゃあ、さっそくレポート始めようか。」

「そうするか。」

そういうと、二人は大きな机のある席へと移動した。

「そういや、信ちゃん最近直子とどうなの？うまくやってる？」

「そうだな、金曜に会ったきり会ってないけど、まあいい感じでやってるよ。」

「それならよかった。二人を紹介した俺としては、やっぱり、うまくいってもらわないと俺の面目がたたないからな。」

「別に、そんなこと気にしなくてもいいよ。俺もやりづらいし・・・」

「まあ、俺は遠くから二人を見守ることにするよ。でも、何かあったら俺に相談しろよ。」

「分かった、分かった。伊藤は本当にそういう話大好きだからな。」

「そんなこと、ずっと前から知ってるだろ。」

伊藤は、高橋よりも調子がよく、大きな瞳と整った顔立ちから、様相は男というよりは女の子といった感じだった。また、初めて会った人にも伊藤は軽く話しかける癖がある。それは、高橋にたいしてもそうであった。現在は時間が経ったおかげか、もう慣れたが、最初は人見知りの高橋にはそんな軽い感じの伊藤が受け入れがたかった。しかし、話してみるととりわけ悪そうなやつでもなく、自分の長所や短所、恋愛経験など次から次に語りだすのだった。聞いていて面倒になることもあるが、話は満更退屈ではなく、高橋自身も気づかぬうちに笑っているといったことが度々あった。そのためか、伊藤には女友達がたくさんいた。直子もそのうちの一人であり、伊

藤の進めもあつて、半年前からお付き合いをしていたのだった。

「そういえば、伊藤は彼女とどうなってるの？」

「んゝ、それが、最近微妙だね。正直俺は、あいつと別れたいと思つてる。」

「・・・」

高橋は素直に驚いた。

「向こうはお前に対してどんな感じなの？」

「向こうは、まだ俺のことが好きみたい。」

「お前、ついこの間まで彼女のこと自慢したり、好きだとか言ってたじゃんか。他に好きな人ができたのか？」

「そうじゃないんだ。ただ、少し疲れたんだ。だから、今度会った時に打ち明けようと思う。」

またも高橋は驚きを隠せなかった。少し前までは、彼女の話をすると言つて食いついてきた人間が、今度は、彼女との関係が疲れたと言つてきた。そりゃあ誰しも、人間関係に疲れるときはある。それは伊藤にとつても同じことだろう。ただ、あまりの急変さと伊藤の表情から話の内容は本気であることが伺えた。

「お前がそう決めたんなら、そうするのがいいよ。」

「いいアドバイスをありがとう。」

伊藤はわざと明るくみせたが、その表情の奥には疲れの色が見えた。高橋は、それ以上のことを聞いてみたかったが、向こうから話してこないどこか普段と違う伊藤と、これ以上聞く必要のないことを知ると、この話はこれで終わりにした。そして、話題も変わり、いつしか二人は、目の前のレポートを仕上げることに集中していた。

レポートは、正午を少し過ぎた頃に完成した。終わつた頃には二人ともくたくたであった。

「いやゝ、疲れたなゝ。とりあえず、なんか食いに行こうか？」

「そうだな。」とだけ高橋が言つと、二人は図書館を出た。空には雲ひとつなく陽も高々と上がっているのに、風が吹いているせいか

想像以上に寒かった。

## 第四話

四、

それから一週間ぐらいたったであろうか、伊藤は宣言通り彼女と別れた。一方、高橋はというと、別段大きな変化はなく、直子とうまくやっているようであった。今も直子と買い物をした後、晩御飯を食べに来ているところだった。

「なんか、この間伊藤が彼女と別れたみたいだな。」

「えっ、本当なの。」

「俺もびっくりしたけど、本当みたいだよ。一昨日かな、俺に電話もかけてきたよ。」

「なんて言ってた？」

「まあ、落ち込んでいるというよりは、開き直ってるというか・・・すっきりしたみたい。」

「ふん。」

「今回、あいつの真剣な表情を始めてみたよ。」

「確かに想像できないな。私も見てみたかったな。」

「見てみたいって、あいつだって悩んでるんだぞ。」

「そっか。」と直子は照れたように微笑した。

その時、「お待たせしました。シーフードパスタと三種のチーズのピザになります。」とテーブルに料理が運ばれてきた。ウェイトレスに軽く会釈をすると、「ごゆっくり。」と笑顔で挨拶をかえしてくれた。それが、普通のことなのかもしれないが、なんとなくいい店だなという印象を受けた。お店の照明はやや暗く、各テーブルに一つずつキャンドルが灯っていた。食事をしている客層も、皆上品そうである。高橋はピザを一口食べてみた。するとこれがなかなかうまい。

「このピザ結構おいしいよ。ひとつ食べてみな。」

「へー、ありがとう。私のパスタも食べてみて。」

二人は、よくお互いの料理を交換して食べた。それは、別にそうしようという意図はなく、ごく自然な行為だった。そして、高橋はそういった自然な仕草と行動で、直子とうまく絡んでいる時が一番幸せなのだった。そういったときには決まって、高橋の顔からは似合わない笑みがこぼれていた。

それから半時ほど店の中で話して、ふたりはカラオケに二時間ほど行き、それぞれ帰路についた。

高橋が家に着いたのは、午前0時頃だった。疲れていたので風呂に入ろうか悩んだあげく、カラオケで汗をかいていたので、シャワーだけ浴びることにした。汗をかいた後のシャワーは気持ちが良い。まるで、自分の中の邪念ともいうべき悪いものがすべて流されていくようである。はたして、流された邪念はどこへいくのか？流された邪念は下水道を通り、川に行く。それから、海へと至り、いづれ蒸発して雲となるだろう。そして、雨が降れば、また地上の人間たちに戻ってくる。結局、戻ってきてしまうではないか。そんなくだらない事を考えている自分がおかしかった。

それから髪を乾かすと、少し本を読んでから電気を消し、布団に入った。うとうとと気持ちよくなってきた頃、ブーブーブと携帯のバイブ音が鳴った。高橋は面倒臭いなあとはいつつ、電話だったので出てみた。

「たっ高橋か、いつ今俺は・・・ええつと、今からお前の家に行っているかい？」

声の主は伊藤であった。どこか話し方が普通ではなく、なにか興奮しているようであった。

「まあ、別にいいけど。これから寝るところだったのに、いったいなんの用なんだ？」

「わっ悪い、それは電話では言えないから・・・その・・・とりあえず行くわ！ごめん。」

高橋は、前の彼女のことになにか緊急に相談があるのだろうと思  
い、それほど気にも留めず、本を読んで伊藤を待つことにした。

二十分程すると伊藤が着いた。ドアを開けると、はあはあと息を  
切らした伊藤の姿があった。目は大きく見開き、やや涙ぐんでいた。  
表情もかたく、興奮しているというよりは、なにかに脅えているよ  
うにもとれた。高橋は伊藤の勢いに少したじろいだが、我に帰ると、  
「とりあえずなかに入れよ。」と言った。

「悪い・・・」

そういうと伊藤はベットのの上に座った。

「なんか飲む？」

「・・・」

「おい、なんか飲むか？」

「・・・」

「おい、伊藤！どうしたんだ。なんか飲むか聞いてんだよ。」

「ああっ、なんでもいいや。冷たいヤツ。」

「おまえ、今日おかしそ。前の彼女となにかあったのか？」

「いや・・・」

高橋は伊藤にウーロン茶の入ったグラスを差し出した。

「ありがとう。」

「で、いったいどうしたんだ。」

伊藤は少しためらうと、重い口を開いた。

「実は俺、さつき人を殺し・・・」

「んん？」高橋は自分の耳を疑った。

「人を何だって？」

伊藤は涙を流しながらある一点を見つめ、恐ろしいくらいに冷静に  
こう言った。

「さつき、人を殺した。」

それを耳にした瞬間、高橋の体に激しい電流が流れた。

「それは本当か？」

伊藤は、うなだれた。



「とりあえず、理由を聞かせてくれよ。俺も、できることはやるから。」

「うん。」

そついうと伊藤は涙を手でぬぐい、たどたどしく話し始めた。

「実は、さつき・・・ひとりで夜景を見ようと思って、車で山を登ってたら・・・」

「登ってたら？」

「お婆さんが道路脇に倒れてて・・・」

「倒れてて？」

「それをひいてしまったんだよ・・・」

「ひいた後、そのお婆さんをどうしたんだ？」

「そのまま・・・」

「ええっ！ということは、お婆さんは、車にひかれた上にこの寒い中、路上にねているというのか！それじゃ、おまえはひき逃げしてきたということになるじゃないか。」

「いや、俺も逃げるつもりはなかったんだが、今日は酒を飲んでて、警察に捕まるのが怖くて・・・」

「ひき逃げに飲酒運転！」

高橋は頭の中が真白になった。

「とにかくこれは大問題だ。これからどうするのか冷静に考えないと、おまえの人生が台無しになる。とりあえず、警察に電話しよう。」

「

「それはやめてくれ！飲酒運転がばれたら大学は退学になるし、まして、人をひいたとなったら・・・もう、俺の人生は最悪だあー！」

伊藤は頭が変になりそうであり、既に冷静に考えることは無理であった。高橋はどうしたらいいのか悩んだ。

「とりあえず、飲酒運転の件は後にして、お婆さんのことを考えよう。おまえが俺に電話してきたのは、ひいてからどのくらいたってからなんだ？」

「ひいてすぐ・・・」

「ならまだ間に合うかもしれない。とりあえず、お婆さんを病院に送って、警察には明日行けばいいじゃないか。明日なら、飲酒運転もばれないし、お婆さんの命が助かれば、そんなに罪は重くならないはずだ。そうしよう!」

「・・・」

高橋はそう決めると、半ば伊藤を強引に連れ出し、伊藤の車を目的の山へと飛ばした。その時にはもう伊藤は泣き止んでいた。けれども、フロントガラスに反射する伊藤の顔は、後悔と不安の色で黒く染まっているように見えた。

## 第五話

五、

「そろそろだよ。」と伊藤が落ち着いて言った。

目的の場所は意外と近かった。それから少し先に行ったが、伊藤は黙ったままであった。

「そろそろじゃないのか。」

伊藤からは何も返答がなかった。

「おい、伊藤。」と言って伊藤を見ると、伊藤は放心状態になり、顔にはじつとりと汗をかいていた。

高橋は道路わきに車をよせ、サイドブレーキを引くと伊藤の肩をゆすった。

「おい、どうしたんだ！大丈夫か。」

「いや、大丈夫じゃない・・・」

「もうそろそろ着いてもいい頃じゃないのか？」

「・・・、実はもう過ぎた。」

「はっ？」高橋は驚いたというよりは、一瞬伊藤が何を言っているのか理解できなかった。

「過ぎたって言っても、お婆さんの姿はなかったぞ。」

「いや、確かに通り過ぎた。ここから少し前の急カーブ。曲がったガードレールと古くなつてチカチカしている外灯があつただろ？あそこだよ。」

気をつけてゆっくりと運転してきたはずだ。それでも確かにお婆さんの姿どころか、ねずみ一匹いなかった。とにかく二人は例の場所へと引き返すことにした。来た道に戻ると、チカチカと点滅する外灯が見えてきた。

「ここでもいいのか？」

「そう。」

確かにそこには何もなかった。ただ、路上に相当出血したとみられる血痕だけが残っていた。

「いったいどうなってるんだ。」高橋にはイライラが募ってきた。車にひかれた後、奇跡的にたいした外傷もなく一人で家に帰ったのだろうか。いや、そうだとするとこの血痕は誰のものだろうか？もしかすると、苦しみながら助けを求めてどこかを這いずり回ったのか。いや、ここを通った他の車がお婆さんを乗せて病院へ行ったのではないか。きっとそうだ。今はそう考えるのが一番妥当であり、そうであって欲しかった。実のところ、ここに来てお婆さんの死体があっても、高橋にはどうしていいか分からなかった。そして、高橋は、「多分、ここを通った車がお婆さんを乗せていったんだよ。」と伊藤に言った。

「そうか、そうだよな。」

「後日きつと新聞やテレビで報道されるよ。それで確かめよう。」

「それもそうだな・・・」

「あとはお婆さんの命が助かるのを祈るだけさ。これを機に飲酒運転は辞めろよ。」

「へへっ・・・」伊藤はぎこちなく微笑した。

実際、高橋にはまだ不安があった。お婆さんの安否と高橋のこれからである。これがきっかけで飲酒運転はしなくなるだろうが、もし、お婆さんが死んでいるとしたら・・・伊藤はその責任を受け止められるだろうか。法の手からは逃れられても、自分が人を殺してしまったという事実からは逃れられない、一生・・・。

その夜、伊藤がひとりになりたくないと言うので、高橋は伊藤を部屋に泊めてやった。布団に入った頃には、時計の針はもう午前二時をまわっていた。心配事は耐えなかったが、事件が一段落したのと精神的な疲れとで、二人ともその日はすぐに寝入ってしまった。

## 第六話

六、

高橋が目を覚ますと、伊藤の姿が見えた。伊藤は高橋よりも早く起きていたらしく。

「もう起きてたのか。いつ目が覚めたんだ？」と高橋が聞くと。

「なんか、夜中トイレに行ってから昨日の事をずっと考えてて眠れなかった。」

「そうか、でも、もう過ぎたことだし、ストレスためると体に良くないぞ。」

「そりゃそうだけど、気にしないでいられるかよ。」

確かに伊藤の言うとおりである。終わった事とはいえ、気にしないでいられるはずはない。けれども、高橋にしてみても、気休めの言葉ぐらいしか、かけてあげられないのも確かである。

「そういえば、テレビ、テレビ！」と突然思い出したように高橋が言った。

しかし、昨日のニュースのことは一切やっていなかった。お婆さんは誰にも見つからなかったのだろうか。そして、今ごろどこか山の中で息絶えているのだろうか。今となっては、知る手がかりがテレビぐらいのものだ。ならば、テレビ局に直接聞いてみようか、いや、それでは変に怪しまれてしまう。現在の時刻は十二時五分、とりあえず、夕方のニュースまで待つとするか。高橋はそう自分に言い聞かせた。

それにしても、伊藤が元気そうで少し安心した。寝不足のせいが目の下にくまができているが、背筋はぴんと伸び、意識もはっきりとしている。おそらく、時間が経って自分のしたことに整理がついてきたのだろう。ただ、お婆さんの安否が分からないうちはなんとも言えない。もしも、お婆さんが亡くなっているとしたら、それは

ほぼ伊藤のせいである。それに気づいたとき、はたして伊藤は今の  
ように落ち着いていられるだろうか。高橋の脳裏には、昨日からの  
不安がよぎった。

「伊藤、そろそろ腹も減ったし、昼飯でも食いに行かないか？」

「ん、俺はいいわ。今日は食欲ないから、家に帰って寝るわ。」

「そうか、でも、家でなにか軽く食えよ。」

「了解。いろいろとありがとな。」

「気にすんなって、困った時はお互い様だろ。」

高橋は車のところまで伊藤を見送った。

「じゃあまたな。もう終わったことなんだ、あんまり深く考えるな  
よ。そして、元気出せ！」

「おう。それと、このことは誰にも内緒だぜ。」伊藤の顔にはどこ  
か曇りがかったものが見えた。初めて見る伊藤のその顔に、高橋は  
一瞬びくついたが、笑顔をつくると手を振った。車は滑らかに発車  
し、どんどんと小さくなっていった。

高橋は、最初、ひとりどこかに食べに行こうかと考えていたが、  
外に出だすのが面倒になり、家で済ませることにした。かといって、  
冷蔵庫には何もなく、結局お湯を沸かしてカップラーメンを食べる  
ことにした。

もう一人暮らしをし始めて三年になる。故に、この部屋に一人で  
いるのは平気なはずだ。けれども、今の高橋の気分は、まるで異国  
の空港に一人ぼつんとおいてこられたような気分である。伊藤はな  
ぜ一人になりたかったのだろうか。単純に、寝不足だったから？い  
や、そんな簡単なことではないだろう。昨日からあいつには波があ  
る。泣いていたかと思うと突然冷静になってみたり、今まで見せた  
ことのない表情を浮かべてみたり、よくよく考えるとあいつのこと  
が分からなくなってくる。けれども、仕方ないことなのかもしれない。  
い。もしも、自分がその立場なら、そう考えると心の底から同情し  
たくなる。かと言って、自分でなくて本当に良かったとも思ってし  
まう。それが、仲のいい友達だとしてもである。この思いはどこか

矛盾していると思われるかもしれない。けれども、これはごく自然のことであり、人間すべてが持っている苦悩とでも言うべきもののだろう。

この時、高橋がこの苦悩と戦っていたということは言うまでもない。そして、これからも高橋を苦しめていくだろう。「あいつは大丈夫だろうか？どうしたら助けてやれるだろう？あいつの力になりたい！」「自分だったら大変だった。とりあえず、自分でなくて良かった。あいつも不運なやつだ。」そういった二つの囁きが、高橋の頭の中を駆け巡っていた。「伊藤よ、すまない。」そういつて、高橋は自分の身を清めた。まるで力士が土俵に塩を振りまくように。

## 第七話

七、

高橋は夕方まで本を読んでいたが、どうしても集中できなかった。文字を目で追うものの、その内容は、ほとんど頭の中に入ってこなかった。カチツ、カチツ、秒針が動くたびに時計の音がやけに気になった。今頃、伊藤もこんな気持ちでいるのだろうか。しかし、そうこうしている内に、夕方のニュースが始まる時間になった。高橋は本を閉じ、テレビの画面にかじりついた。ニュースの頭を飾ったのは、北朝鮮の核問題についてであった。それに続いて、ある県の知事が犯した事件や教育現場における自殺等の事件などが報道された。どれも最近ずつと報道されている退屈なニュースばかりである。そして、二十分程し、ようやくローカルなニュースに切り替わった。いよいよである。そう思うと体が自然と前屈みになり、なんだか呼吸は深く遅くなり、心臓が糸で吊り上げられているような感覚になってきた。こんなに緊張するのは、きつと大学受験以来であろう。どこことなく懐かしい感覚だが、あまりいいものではない。そんなことを思っていると、次の瞬間、高橋の全身が凍りついた。

お婆さんは死亡していた。それは、高橋が予想していた通りであった。けれども、いざ確定するとショックなものである。正に、自分は死刑だと予想していた犯罪者が、実際に裁判で死刑を言い渡された時の面持ちみたいなものである。ニュースによると、お婆さんを発見したのは、伊藤がひいた後に車で通りかかった人らしかった。そして、その人がお婆さんのところへ駆け寄った時には、もう死んでいたという。即死だった。お婆さんの身元は、詳しく報道されなかったが、あの山の中で一人暮らしをしており、年齢は八十六歳だという。山奥のため近所付き合いもほとんどなかっただろう。八十歳を過ぎて、山奥でよくひとり暮らしをしていたものだ。寒い夜な



どはどんなに心細かっただろう。そうしたなかで、このような最期をむかえてしまった。けれども、不幸中の幸いとも言うべきなのは、即死であったということだ。そうは言っても、美しい死に際ではなかったことは確かだ。哀れである。いつも、そう反射的に思うだけだが、今回ばかりは、心の底からそう思った。そして、それを体で表現するために、高橋は手を合わせて黙祷を捧げた・・・。

警察の調べでは、路上に血痕があったのと、車の破片があったのとでひき逃げであるとしている。こうなってくるといよいよまずくなる。おそらく、伊藤もこのニュースを見ているはずだ。伊藤の今の心境はどんなだろう。そこで、高橋は伊藤に電話を試してみた。

「おう。」伊藤が電話にでるのは早かった。

「おう、お前今ニュース見てたか？」

「うん、見た。でも俺、これからどうしていいんだか分からないよ。もうこの先真つ暗つて感じた。」伊藤の口調は案外冷静だった。もう、心の準備ができていたのだろうか。

「そうだな、とりあえず、警察に自首した方がいいと思うよ。今なら飲酒運転もばれないし、警察の捜査でひき逃げが判明したら罪が重くなるよ。俺も付き添うから、一緒に警察に行こう。自首すれば、罪は重くならないよ。」

「・・・」

「なあ、そうしよう。」

「・・・」

「伊藤！」

「それはできない！正直怖いんだ・・・」

「でも、このままだとお前のなかで整理もつかないぞ！」

「そんなことは分かってる。頭では分かっているんだよ！それに、お前は人事だからいいよな！」やはり、伊藤はこの事件のことで過敏になっていた。今まで伊藤が強く当たるようなことはなかった。もうこうなってしまうては、冷静な話ができない。そう判断した高橋は「すまない、もう少し様子を見よう。」とだけ言うと電話を切っ

た。今の伊藤を癒せるのは時間だけである。とにかく、彼と時間にまかせるしかない。あいつももう大人であり、冷静になってじっくり考えれば、事の善悪や自分の進むべき道が見えてくるだろう。それまで、自分は温かく見守るのだ。

それにしても、高橋には伊藤の「お前は人事だから・・・」という言葉が、妙に気にかかった。実際、そう言われても言い返す言葉が見つからなかった。伊藤は本当にそう思っているのか、それとも自分にストレスをぶつけてきているだけで、そうは思っていないのか。それは、今の伊藤にも分からないであろう。

付けっぱなしにしていたテレビのニュースでは、天気予報をしていた。どうやら、明日は雨のようである。明日からまた一週間が始まるというのに、いやな事は立て続けに起こるものだ。ここまで、いいことがないとため息よりも笑いが出てくる。そうして、高橋は鼻で不気味に笑った。

## 第八話

八、

今日は月曜日、高橋は少し早めに学校へ向かった。講義室に着くと、まだ誰も来ていなかった。高橋は、こんなに早く来たことがなかった。この時間だと誰も来ていないのかと少し驚いた。まず、電氣をつけると、真ん中より少し後ろの方の席に座った。無論ここからでは、大きな字がかるうじて見える程度である。けれども、高橋にとってそんなことはどうでもいいのである。そもそも大学の講義ほど退屈なものはない。それをまじめに聴いているのは、根っからの真面目か、頭が固いかのいずれだろう。しかし、講義を聴かないからといって、一番後ろの方に座ることはなかった。それには、高橋なりのこだわりがあったのだ。

まず、一番後ろでは先生から目立ってしまう。ただそれだけのことだが、それが重要なのだ。別段、騒いでいなければ、目立っていても注意はされなかったが、先生に見られているという威圧感が嫌なのだ。その威圧感から避けるため、高橋は目立たない所へと席を陣取るのだった。そして、気に入った縄張りを確保すると、本を読むか首を垂れて寝るのが一般的であった。今日はいつもより早く来たため、理想的な席を確保することができた。それだけで、一日の出だしに成功した気分になれた。

以前として、講義室は閑静なままである。ひよつとすると今日は休みなのか、それとも、自分を残してこの世から人々が消えてしまったのか？そういった高橋のくだらない妄想が始まった。今講義室を出ると外は戦場である。北朝鮮が核ミサイルを日本に向けて発射し、外は火の海と化している。服が燃え落ち、二の腕からは肉片が垂れ下がっている。体と体の皮膚がくっつかないように、両腕を前にかざし、「水をくれ、水をくれ。」と叫ぶ。どの病院も火災と爆

風で駄目になり、火傷を負った人々は川へと飛び込んでいくのだ。唯一無事なのは、高橋のいるこの講義室である。いわば、核シエルトーとも言おうか。しかし、この大きな部屋に一人でいるのは、少し心細かった。一人でいるのは嫌いではないが、場所が悪かったのだ。

そのような変なことを考えているうちに、何人か人が入ってきて、高橋の妄想は妄想で終わった。そして、五分前になると人がどっと集まりだした。まるで都会の通勤ラッシュを見ているようである。辺りは挨拶やおしゃべりなどで、一時騒然となった。先ほどの静けさがうそのようである。それは、先生が来てもなんら変わることはなかった。みんな先生が来たことに気づいていないのか、なめているだけなのか、それは分からないが、先生がマイクを通して声を張り上げると、だんだんと静かになっていった。無論、高橋は周りを観察すると共に、本を読んでいた。そして、しばらく授業おしゃべりのBGMを聞きながら本を読んでいると、あることに気がついた。もしかすと、伊藤が来ていないかもしれない。

高橋と伊藤は、ほとんど同じ講義を受けていた。来る時間帯が違っていても、毎回同じようなところに座るので、後から来た方がもう一人を探し、いつも近くに座っていたのだ。けれども、今日は伊藤の気配がなかった。やはり、あの事故のことを気にしているのだろうか。気になって、高橋はメールを送ってみた。そして、講義が終わるまで、また本を読んだり、居眠りをしたりした。けれども、そのメールに返信が来ることはなかった。高橋は、一日中返信を待っていたが、結局伊藤から連絡が来ることはなかった。まあ、誰とも離れて独りになりたい時もあるだろう。そう思った高橋は、無理に電話をかけることもしなかった。

伊藤から連絡があったのは、それから二日たってからのことだった。「連絡遅れてごめん。実は今、実家に帰ってるんだ。親には体調が悪いことにして、事故のことは一切話してないけど、落ち着いてきたら相談しようと思う。お前にはいろいろと迷惑かけて本当にごめ

んな。そっちに帰ったら、また連絡するわ。それまで、俺のことは考えなくていいよ。ありがとう。」そのような意味のことを言っていた。声の調子からして、以前よりは元気そうで、どこかさっぱりしていた。やはり、実家に帰ると落ち着くのだろうか、とりあえず安心した。二三日親元で心を落ち着ければ、両親と相談することができるだろう。そうすれば、自分よりいいアドバイスがもらえるだろう。警察に自首する勇気が出るかもしれない。まだ、一件落着というわけではないが、高橋にはもう解決したかのように思えた。そういえば、最近直子と会ってないな。高橋はふとそう思った。会っていないどころか、伊藤のこともあり、直子のことから完全に離れていた。また、向こうからも連絡がほとんどなかった。特に気にはならなかったが、週末は一緒に過ごそう、そうして癒してもらおうと考えた。そのため、高橋は直子に電話をかけてみた。

「あつ、もしもし直子？久しぶり。元気にしてた。」

「元気にしてたじゃないわよ。最近メールもくれないんだから。」

「ごめん。怒ってる？」

「怒ってるわけじゃないけど、ひどいじゃない。」

「ごめん、ごめん。最近忙しくて。」

「なんか、それじゃ私が忙しくないみたいじゃない。」

「ははっ、そうかもね。」

「ふふっ、もう。」そう言つと直子は笑った。

「週末空いてる？どこか行こうよ。」

「ほんとに？じゃあ、土曜日にしようか。どこか景色が綺麗なところに行きたいな。」

「景色が綺麗なところか。ん、まあ調べとくよ。」

「うん、よろしく。」

「これで機嫌なおった？」

「まだまだ、土曜日にはいっぱいおごってもらいますから。」

電話の向こうでは、直子の可愛い笑い声が聞こえた。それを聞いていると、自然と高橋の頬もゆるくなってくる。人間とは不思議

なものである。形相を見れば形相に、笑顔を見れば、笑顔になる。しかも、意識とは裏腹に自然とそうしてしまうのである。

「分かりました。それじゃ、またね。」

「うん、またね。」

## 第九話

九、

土曜日の朝、高橋と直子は駅で待ち合わせをしていた。高橋の計画では、今日はローカル線に乗って紅葉を見に行くということになっている。紅葉はもう見ごろを過ぎていたが、そんなことはどうでもよかった。美しいものは、その全盛期よりも、それを少し下っている辺りの方が心に訴え掛けてくるものがあって、非常に感慨深いものである。それに加えて、直子と出掛けるのも久しぶりである。それ故に、場所よりか、ふたりで会うということの方が重要であったのだ。

「おはよう。」向こうから直子が手を振りながら、足早に歩いてくる。高橋は声は出さなかったが、それに応えるため右手を頭の上にあげた。

「ごめん、待った？」

「いや、俺もさつき着たばかりだから。」

「そう、ならよかった。ところで今日はどこに行くの？」

「えっと、今日は紅葉を見に行こう。」

「いいわね。場所は？」

「俺も行ったことないんだけど、なんとか渓谷。」

「なんとか渓谷？まあ、とりあえず渓谷に行くのね。」直子の顔からは笑顔がこぼれた。

高橋は直子のそういうところが好きだった。そういうところというのは、余計なところで深入りしてこないクールなところだ。直子は、「それってどこら辺にあるの？」と聞いて、場所を絞ってみたい、「ちゃんと調べといてよ。」と冗談で言ったりして絡んでくることはなかった。ただ、笑顔で応えるだけである。それに応えるように高橋は笑顔でこう言った。

「まあ、場所は分かるから、行けば分かるよ。とにかく行ってみよう。」

「それじゃ、行きましょう。」そう言って二人は切符を買うと、プラットホームへと向かった。

まだ午前十時ということもあり、少し寒かった。けれども、空は晴れていて出掛けるのには最高だった。十分ほど待っていると、クリーム色の電車が近づいてきた。よく見るとその電車は二両しかなかった。それを見た直子は、

「すごい！私こんな小さな電車に乗ったことないわ。」と言ってはしゃいでいた。

無論、高橋も心が高揚していた。高橋自信、産まれは田舎の方であるが、このような電車はテレビでしか見たことがなかった。

プシュー。そういうと電車のドアが開いた。そうして、ふたりは中へと入った。座席は赤色で、二人がけのものではなく、山手線のようにすべて向かい合った座席だけだった。乗客も自分たち以外に制服を着た学生と、中年のおばさんの二人しかいなかった。土曜日のこの時間帯になぜ制服を着た学生がいるのか分からなかったが、それはさておき、電車はほぼ貸切といった状態だった。

そのうち電車は街中を抜け、車窓の外は一面畑が広がっていた。そして、畑の中には、手ぬぐいをかぶった老夫婦がもくもくと仕事をしていた。どこか、日本の懐かしい風景を思わせる。延々と続くその光景を見ながら、高橋はうつとりといていた。その時、

「私たちは何駅で降りればいいの？」と直子が突然聞いてきた。

「えっと、確か雄山駅だったかな。」

「ふーん。後どのくらいで着くの？」

「多分、一時間くらいかな。」

「ふーん。」

高橋は直子の質問が、まるで小学生が親にする質問のようでおもしろかった。そうして一人でにやにやしていた。一方直子の方は、それには気づかず、車窓の景色を眺めながら鼻歌を歌っていた。



それから一時間が経過するのは意外と早かった。直子はいつの間にか眠っていたが、「雄山、雄山駅です。」というアナウンスがなると、はっとして目が覚めたようだ。そして、ふたりは電車から降りた。電車から降りると、これまたテレビでしか見たことのないような光景が広がっていた。駅舎は、まるで昔の映画に出てくるような感じのもので、古く、小さく、すべてが木でできていた。ここでも二人は感動させられた。まるで、違う世界に来たようである。改札口を出ようとすると、一人の駅員さんが切符を受け取っていた。そうか、ここは自動改札ではないのか、そう思いながら切符を渡すと、高橋は駅員さんに溪谷のことを聞いてみた。

「すみませんが、この辺りに紅葉の綺麗な溪谷があると聞いて来たんですが、場所は分かりますか？」

「はい。えっと、それはおそらく百鬼溪谷のことですよ。この駅を出るとバス停があるので、緑ヶ丘団地行きのバスに乗ってください。そうしたら十五分くらいで着きますよ。」

「ありがとうございます。」と高橋は軽く頭を下げた。駅員は腕時計を見ると、

「それとこの路線は一時間に一本しかないので、次のバスが来るまで三十分位かかるよ。」

「そうなんですか。」ふたりは驚いた。

「なんなら駅員室で休んでいく？」と軽い調子で言った。

「それはありがたいのですが、仕事の邪魔になりませんか？」

「いいの、いいの、仕事と言う仕事はないから。外は寒いから中に入って。たいしたものはないけど、お茶ぐらいは出せるから。」

「じゃあ、お言葉に甘えて・・・。」そういうと、ふたりは駅員室にお邪魔した。

駅員室は八畳ほどの大きさで、こたつや水道、冷蔵庫などがあつた。壁の柱には、「火の用心」と書かれたシールが貼つてある。また、床は畳であり、部屋全体に昭和の懐かしいにおいが漂っていた。それに、布団があればここでも生活できそうである。言うまでもな

く、内装は古かったが、汚いという印象は受けなかった。それどころか、秘密基地に案内されたような気分で、わくわくしていた。直子の様子を見ていても、そのようだった。

「ふたりは恋人ってやつなの。」と言いながら、駅員さんはお茶を運んでくれた。

「まあ、そんなところです。」と会釈をしながら高橋が言った。

駅員さんの年齢は五十歳位で、背は高橋よりも十センチ以上高かった。また、背が高いただけでなく、横の幅もあった。ワイシャツのボタンがはじけ飛びそうなほどお腹が出ていた。その体型は、駅員になる前に相撲取りをしていたのではないかと思わせる位だった。けれども、その体型が、駅員さんの優しいイメージを強めているというのも否めなかった。

「僕もかれこれ二十年になるかな、ここで働いて。」直子は駅員の話にリズムよくうなずいていた。それから駅員は続けた。

「二十年前はよかったよ。こちら辺も賑やかで、朝と晩は通勤や通学で利用客も多くてね。それから、休日には観光客も多かったな。あの頃は僕も若かったし、ばりばり働いていたよ。それが、時が経ってみんないなくなってしまうたんだよね。」

「いなくなってしまったというのは？」

「若い子たちは、ここから通うのではなく、みんな外に行ってしまったんだ。それに、僕ぐらいの人たちは退職ときているだろ。それが自然なことなのかもしれないけど、当時はそんなこと夢にも思わないだろ。なんかここで働いていて、みんなの成長を見ながら、共に生きてきた気がするけど、今はひとり寂しくここで働いているのさ。」

「そうなんですか。でも、素敵な駅舎だと思いますよ。」と高橋が言うと、

「私もそう思います。なにか他の駅とは違った温かみがありますよ。」と直子も続けた。

「ありがとう。そういつてもらえると僕もこの駅舎もうれしいよ。」

そのようなことを話しているうちにバスの来る時間が近づいてきた。

「そろそろバスの来る頃だな。」そう言うと駅員さんは、冷蔵庫からジュースを一本ずつくれた。

「すみません。休ませてもらって、こんなものまで。」

「いいの、いいの。僕の方こそ話を聞いてもらってありがとう。やつぱり、若い子と話すのはいいいね。」

「それじゃ、また帰りにでも。ありがとうございました。」ふたりは礼を言つと駅員室を出た。山沿いの道路の向こうからは一台のバスがこちらへ向かつてくる。きつとあのバスが自分たちの乗るバスであろう。

バス停から臨む山々も赤や黄色に染まっていた。もう全盛期は過ぎているが、それなりに美しく、いろいろと考えさせてくれるものがある。それがいいのだ。この雄山駅も全盛期を過ぎている。けれども、内に秘めた美しさは全然衰えていない。むしろ、その輝きは増しているだろう。外見だけでは見落としてしまう美しさ、それはその人の心でしか見えない。美しいものを感じるには、その人の心が綺麗でないといけないのである。高橋はそう確信した。

「バスが来たよ。」と直子が言った。

緑ヶ丘団地行き、と書かれたバスが目の前に来ていた。高橋は、「おう。」と言うと、バスに飛び乗った。無論バスの中では、さっきの駅員の話で盛り上がった。

## 第十話

十、

バスから降りると、百鬼溪谷とかかれた看板が立っていた。看板には、名前の由来などが書いてあったが、それには気をとめなかった。そして、二人は、車がようやく一台通れるかというくらいの狭い道をどんどん登って行った。道の脇には大きな岩と共に、澄みきったきれいな水が流れていた。けれども、景色は殺風景である。この見所はもう少し上ったところに在るのだらう。それから、二人は何人かの観光客とすれ違いながら十五分ほど歩いた。すると、視界が少し開けた場所にたどり着いた。奥には、さらに狭い道があったが、人が通ったような形跡はなかった。おそらく、ここが百鬼溪谷最大の見所といったところなのだらう。

もう、大分葉は落ちていたが、赤や黄、茶といった色が、溪谷全体の雰囲気を明るく、そして、どことなくやさしく染めていた。枝から落ちた葉は、地面に落ちるか岩の上に落ちていた、はたや沢の流れに任せて新たな旅をするものもあった。その美しい衣を冷たい水に浸しながら、いったいどこへ向かうのだろうか。一方、まだ枝を飾っているものたちは、太陽の光に照らされながら、より一層きれいに見せようと必死になっていた。君たちは、いずれ枝から落ち、朽ち果てる運命なのに、どうしてそんなに輝こうとするのか。感情もないのに、どうしてそう人の心をとらえて止まないのだ。肌を擦るような清々しさ、木々の匂い、沢の流れる音、そして色とりどりの葉、それら全てが高橋の五感を刺激し、高橋の心を、いや全身の細胞を高揚させた。

「いい所だね。」そう言つて高橋は直子の方をうかがった。

「うん、なんか落ち着くね。」そう言いながら、直子は携帯で写真を撮っていた。

高橋は、携帯のカメラでこういった景色を撮るのに少し抵抗があった。しっかりとした一つのカメラなら問題はなかったが、携帯で撮られると、大事な物に傷をつけられているような気分になった。けれども、そのことを直子に言っても仕方がないと思い、結局そのままにした。

「そろそろ、お昼御飯にしようか？」

「そうだね。」

「だけど、どこに行けばいいのかな？とりあえず、戻ろうか。」

「そうね。そうしましょ。」

そう言いながら、二人は来た道を引き返した。そして、百鬼溪谷とかかれた看板のところまで下りてきた。

「戻ってきちゃったね。」そう言いながら、直子は高橋の方を見つめた。

「そういえば、ここに来る途中、そば屋があったけど、そこでもいいかな？」

「うん。体も温まるし、調度いいんじゃない。」

「じゃあ、そこに決定。」

「それで、場所は分かるの？」

「ん、それは適当。確か、向こうから来たから、向こうに歩いていけば、いつか着くよ。」

「ええ。けど、まあいいか。」と直子は微笑した。

そば屋までは、想像以上に遠かった。バスから見たせいか、実際に歩いた距離は相当だった。二人とも着いた頃にはヘトヘトで、注文するので精一杯だった。

「僕は、山菜そばで。」

「私は月見そばをお願いします。」

「はい。分かりました。山菜と月見ね。」

注文を受けたのは、腰の曲がったお婆さんであった。顔は皺だらけであったが、ひとの良さそうな印象を受けた。高橋と直子の他に客はいない。こじんまりとした店内は、田舎の民家を思わせるように

ある。

「ごめん、意外と遠かったね。」

「でも、たまにはいい運動ね。」

「ははっ、確かに。」店内には、二人の笑い声が響き渡る。

お店の中央には、やかんの載った大きなストーブがごうごうと燃えていた。熱気のせいか、ストーブの周りの空気は、ゆらゆらと揺らいでいた。それを見ていた高橋はなんだか眠たくなってきた。紅葉に満足したからか、歩いた疲れからか、店の雰囲気からか、その理由は分からないが、胸いっぱい広がる充実感があったのは事実である。そうして、いつの間にか高橋は寝入ってしまった。

「信くん、起きて。」

しばらくすると、直子の声が入ってきた。そして、目を開けると、目の前に山菜そばが湯気をもくもくと立てながら、高橋の目覚めを待っていた。

「いい匂いだな。」そばのおかげで高橋の眠気は吹っ飛んでしまった。

「もう、いきなり寝ちゃうんだもん。」

「ははっ、なんか気持ちよくなっちゃって。」

無論、帰りのバスと電車では二人とも寝入ってしまった。幸い、電車は終点だったので良かったが、そうでもなければ、永遠に寝ていただろう。そのくらい、その日は充実していたのだ。

## 第十一話

十一、

その日も、高橋はいつもの場所に席を陣取っていた。なにをしているかというところ、無論読書である。講義をしているせいか、講義室は静かであった。けれども、一つ耳ざわりなのは先生の声である。そうは言うものの、向こうはそれが仕事であり、自分もそれを聞くのが本分であるから仕方がない。しかも、こちらは金を払っているもの、もちろん、それを払っているのは親だが、話を聴かないのは、少し損のようにも思える。しかし、聴きたくないものを無理に聴こうとするのは不自然である。不自然なことをするとストレスが堪る、ストレスが堪ると不愉快である、不愉快になると胃に穴が開く、誰しも胃に穴が開いては堪らない。やはり、ここは本を読んで寝る方が良さだろう。

居眠りから目を覚ますと、高橋はあることに気がついた。それは、またもや伊藤のことである。本人は実家に帰ったというし、最近直子との時間が多かったので、彼のことはすっかり頭から離れていた。いくら実家に帰ったとはいえ、もうしばらく前のことである。あいつは本当に親と相談ができたのだろうか？ もしや、親と警察に自首しに行ったのかもしれない。

最近では、伊藤がしばらく学校に来ないので、周囲では「あいつは休学している。」とか「なにか事件に巻き込まれたんじゃないか。」とかいう変な噂が広まっていた。こういう時は決まって悪い噂である。「あいつは留学しに行ったんじゃないか。」とか「どこかの事務所にオファーされたんじゃないか。」というようないい噂は聞いた例がない。どうせ有り得ない噂なら、そういうものの方が気持ちが良いものだ。けれども、伊藤の場合は、現実起こっていることがあまりいい事ではないので、そういった噂を鼻で笑って

もられない。

その日の講義は、午前中で終りだった。それで、久しぶりに高橋は、伊藤に電話を掛けてみた。けれども、何度掛けても留守電になってしまふ。この事を相談できる人は、伊藤以外にいるはずもない。その当人も電話に出ない。高橋の胸からは、伊藤への心配と不安がこみ上げてきた。とりあえず、あいつはまだ実家にいるはずだ、携帯に出ないのなら直接家に電話を掛けてみよう。そう思い立つと、高橋は、一旦自分の家に戻った。

家に帰ると、高橋は本棚を見回した。そして、目的の本を手にとると急いで調べ始めた。その本というのは、高橋の学年の名簿である。まさかこんなことで名簿が役に立つとは、高橋もびっくりである。そして、伊藤の実家の番号を見つけると、一呼吸おいて電話を掛けた。

「もしもし、伊藤でございます。」電話に出たのは、伊藤の母親らしかった。

「もしもし、はじめまして。高橋信幸と申します。隆君には大学でお世話になっております。」伊藤の母親と話すのは初めてだったので、高橋の口調はどこかぎこちなかった。伊藤の名前も母親の手前、隆と呼んでみた。

「隆のお友達ね。どうも、こちらこそ隆がいつもお世話になっていきます。」

「いえいえ、そんなことないですよ。」高橋の声はまだぎこちなかった。

「それで、今日はどうかenasったんですか？なんか隆が問題でも起こしたんですか？」高橋は会話の流れが少し変に感じた。母親はただあの事を知らないのだろうか。

「いえ、違いますよ。ただ、隆君と話したくて。今いますか？」

「いませんよ。だって、今日は学校あるはずよね。」

「あつ、はい。学校は午前中だけありました。」

「そうなの。じゃあ隆は行かなかったの？」



「はい、多分来てなかったと思います。」

「もう。うちの子は仕方ないわね。お父さんに似て、さぼり癖が出てきちゃったのかしら。」

「ははっ・・・そんなことないですよ。」高橋は一応笑いを入れておいた。

「隆は、最近学校行っていないんですの？」母親は少し不安そうにそう質問してきた。

「すみませんが、そこまでは分かりません。ほとんど違う講義をとっているの。」と高橋は嘘をついた。それもこれも母親を刺激しないためである。

「そう。じゃあ隆に会ったら、ちゃんと学校に行くように言ってもらえます？ほんと困っちゃうわ。」やはり、おかしい。伊藤は実家に帰っていないのかもしれない。このままでは埒が明かないので、高橋は思い切って切り込んでみた。

「隆君はそちらに戻ってはいませんか？」

「いえ、あの子が戻るのは夏休みと正月くらいよ。近いけれど、あんまり帰ってこないのよ。でも、どうして？」

「いえ、ただ聞いてみただけです。最近僕も会っていないので、家に帰ったのかと思って・・・」高橋は言ってしまった後に、少し言い過ぎたのではと後悔した。

「そう。こっちから連絡すると、あの子うるさいとか言ってるのよ。だから、隆から連絡があったら伝えておくわ。それと・・・ごめんなさい、名前はなんでしたっけ？」

「高橋です。」

「高橋君ね。」

「それじゃ、よろしくお願いします。」そういうと高橋は電話を切った。

伊藤は実家になど帰っていなかった。それでは、あの日からあいづはどこで何をしていたのだ？とりあえず、冷静になろう。高橋はそう自分に言い聞かせた。

ともかく、伊藤の家に行ってみよう。家というのは実家のことではなく、下宿の事である。そう思い立つと、高橋はできるだけ強く自転車のペダルを踏み込んだ。けれども、前に進むのは体より心のほうが早かった。

## 第十二話

十二、

高橋が伊藤の家に着いた頃には、息が途切れ途切れになっていた。自転車に急いで鍵を掛けると、高橋はすぐに伊藤の部屋へと向かった。伊藤のアパートは三階建ての小さなもので、大分古いせいかベージュ色の壁にはノロがはっていた。ちなみに伊藤の部屋は一階の105号室である。ドアのポケットには、勧誘やピザの広告が、これでもかと言わんばかりに押し込められていた。伊藤は家にはいないのだろうか？そう思いつつも、インターフォンを鳴らしてみる。しかし、一向に人の気配を感じられない。高橋はドアを叩いてみた。けれども、結果は同じである。携帯の着信履歴を見てみても、伊藤からの連絡はなかった。そうだ、伊藤の車を見てこよう。そう思い立つと、高橋は少し離れた所にある駐車場へと向かった。

伊藤のアパートは駐車場が狭く、車が三台も入ればいっぱいになってしまう。そのため、伊藤は少し離れた所にある月極の駐車場に車を停めていたのだ。駐車場に着くと、伊藤の車がいつもの場所にひっそりと停まっていた。高橋は車の近くに行くと、中を覗き込んでみた。無論、伊藤の姿はなく、変わった雰囲気も感じられない。しかし、事故で壊れたバンパーとライトが痛々しく感じられた。

高橋は、一旦伊藤のアパートに引き返した。そして、今度は駐輪場で伊藤の自転車を探した。すると、車と同様自転車もあった。やはり家にいそうである。そうでなければ、電車などで遠くに行ってしまったのだろうか？

その時、駐輪場に一人の女性が自転車を押してきた。外見からこのアパートの住人であることは間違いないであろう。そこで、高橋は思い切って話しかけてみた。

「こんにちは。」

「えっ、あつ、こんにちは・・・」いきなり知らない人から声を掛けられたせいか、女性はおどおどしていた。

「すみませんが、あなたはここのアパートの方ですよ？105号室の人のことで、何か知っていますか？」

「いえ・・・会ったこともないので、ちよつと分かりません。」

「そうですか。どうもすみませんでした。」そう言うと、高橋は軽く会釈をした。一方、話しかけられた女性の方は、迷惑そうであった。高橋との会話が終わると、小走りにアパートの中へと入って行ってしまった。こんな時こそ、街頭でティッシュ配りをしている人たちの気持ちがよく分る。

それから高橋は、また105号室のドアの前に立っていた。今度はさつきよりも強くドアを叩いてみる。ドアを叩いて駄目なら、手と一緒に声も出してみる。そうこうしている内に半時ほど経ったであろつか、もうこうなつてしまつては、あれしかない。このドアを蹴り破ろう！冗談まじりにそんなことを考えていると、アパートの入り口の方から六十歳くらいの男性がこっちに向かってきた。なにやら、高橋に向かって手招きをしているようである。それと一緒に何か言っているようだったが、あまりよく聞き取れない。

「その人。」

「はい？」

「君だよ君！」

「僕がなにか？」

「困るよ、こんなところで。」

「あつ、すみません。友達を訪ねて来ただけなんですけど・・・」

「そうなの？私はここの大家をやっている者なんだけど、さつき不審者が来ているって電話があつたから、見に来たんだよ。」

「すみません、ご迷惑をかけて。」そういうと高橋は頭を下げた。

それと同時に、高橋の頭には駐輪場の女性が頭を過ぎった。

「いや、不審者じゃなければいいんだけどね。それで、ここの人になんようなの？」

「ここにいるのは僕の友達なんですけど、最近連絡が取れないので、直接来てみたんです。車と自転車があつたので、部屋にいるかと思つたんですけど、いくら呼んでも反応がないんですよ。それで、困つたところですよ。」

「ふーん、そうなの。僕も、ここに住んでいるわけじゃないから、住人の状況は分からないけど、なんなら鍵を開けようか？」

「あつ、大丈夫ですか？できれば、お願いします。」

「はいはい、ちょっと待っててね。」そう言う和大家さんは鍵を探し始めた。

高橋は、大家がいい人そうではつとした。けれども、大家の体がタバコ臭いのは、少しではあるが不快感を覚えた。大家さんは、白髪まじりのひげを生やし、頭にはえんじ色のニット帽を被り、せつせと鍵を探している。

「えつ」と、ここは105だね。」やつと鍵を見つけたのだろう、大家さんは、そう言うと言鍵穴に鍵を差し込んだ。そして、いとも容易くドアは開いた。中は真つ暗とまではいれないが、明るいとも言いが難い。

「伊藤。いるのか？悪いけど、勝手に入るぞ。」そう言う、高橋と大家は部屋の中へと入って行った。部屋の中は臭いがこもっており、大家のタバコの臭いのよりも不快に感じた。玄関にはゴミがためてあつた。大方、臭いの原因はこれであろう。

二人はゴミを避け、キッチンを過ぎると、奥の部屋へと続くドアを開けた。次の瞬間、高橋は自分の目を疑った。なんと、ベットの上にちゃっかりと伊藤が座っていたのだ。しかし、二人が部屋に入ってきたことに気がつかないのか、それとも知らないふりをしているのか、伊藤は黙っていた。

「おい、伊藤。さつきから呼んでたのに、いったい何やってたんだ。いるならいるで、ちゃんと出てこいよ。」

「ああ、ごめん。」そう返答するものの、伊藤の目は壁の方を向いていた。

「悪いけど、私はこれで失礼するね。」そう言う和大家は出て行った。高橋は、ありがとうございました、とだけ礼を言った。

その時、ドサツという大きな音と共に伊藤がベットから落ち、床に平伏した。

「おい、大丈夫か？」

その声を聞きつけたのか、大家は引き返してきた。

「どうしたんだい？」

「伊藤が、突然気を失ったみたいなんです。」

「とりあえず、救急車を呼ぼう！」そう言っ、大家は119をダイヤルした。高橋は、白目の伊藤をかかえ、ベットにそつと寝かした。よく見ると、伊藤の顔はげっそりとこけており、目の下にはくまができています。呼吸も脈もあるので、命に別状はないであろう。

それにしても、いったい伊藤の身の回りでは何が起きているのだろうか。あの事故以来、伊藤は心身共におかしくなった。体調が回復したらゆっくりと話をしてみよう。

それから、高橋と大家は救急車に乗り、伊藤と共に病院へと向かった。

### 第十三話

十三、

高橋と大家は、集中治療室の前のソファ―に座っていた。病院の中はやけに静かである。人の歩く音以外、何も聞こえない。そうした静けさを破るかのように大家が口を開いた。

「しかし、驚いたね。」

「ええ、しばらく連絡がなかったかと思うとこれですから、あいつには世話をやかされますよ。」高橋は下を向きながらそう答えた。

「君たちは友達なのかい？」

「はい、大学に入ってから友達です。」

「そうか、じゃあ辛いだろうね。」

「ええ、まあ。」

それからまたしばらく沈黙が続いた。そして、今度は高橋の方から口を開いた。

「最近、あいつのことがよく分からないんですよ。なにか、あいつのことを知ってますか？」

「んん、申し訳ないけど、住居人の個人情報把握してないんだよ。ごめんな。」

「そうですか。」

「それで、彼とはどのくらい連絡を取ってなかったんだい？」

「だいたい二週間くらいですかね。」

「二週間か、それは長いね。二週間前は元気だったの？」

「まあ、体調は良かったと思いますけど・・・」

「なにかその頃にあったのかい？心当たりは？」高橋は事故の事が頭によみがえり、一瞬ドキツとした。

「いえ、特に心当たりはありません。」やはり、事故の事は誰にも言えない。

「そうか、まあ、とりあえず体を治すことの方が先だよ。それから、彼とゆつくり話するのがいい。」と言いながら、大家は高橋の横顔をのぞいた。

「そうですね。」高橋は下を向いている。

「ああ、それと、君の名前と電話番号を聞いてもいいかな？」

「はい、いいですよ。」そう言うと、高橋は大家に名前と電話番号を教えた。

「すみませんが、大家さんの電話番号も教えていただけますか？」

「ごめん、ごめん、うっかりしていたよ。」そう言うと大家も高橋に電話番号を教えた。高橋は名前も教えてもらったが、難しい名前だったのと伊藤のことで頭がいっぱいだったのとで忘れてしまった。二人の会話はこれでお仕舞いである。そして、また長い間沈黙が続いた。会話が途切れてから三十分近くたったであろうか、治療室から担当の医者が出てきた。

「伊藤はどうでしたか？」高橋は下を向いていた顔を上にあげた。

「どうも、お待たせしました。命に別状はないようです。過度の睡眠不足と栄養失調からこうなったのでしょう。おそらく、ここ一週間以上何も食べてないですよ。まあ、早い段階で治療できたので、体の面は大丈夫だと思います。けれども、精神的に病んでいるようなので、体調が回復した後も精神的なケアを受けた方が良くかと思われれます。」

「はい分かりました。ありがとうございました。」そう言うと高橋と大家は頭を下げた。

「ご親族の方ですか？」

「いえ、違います。僕は彼の友達です。」

「私は、彼の住んでいるアパートの大家です。」

「そうですね。一応体が回復するまで一週間ほど様子を見たいので、入院という形になるのですが、彼の親族の方と連絡は取れますか？」

「あつ、はい。私の方から連絡しておきます。」と大家は張り切っていた。



高橋は、内心大変なことになってしまったと思った。伊藤の家族にこのことが分かってしまうと、事故のことがばれしまうかもしれない。しかし、入院したことを隠すことはできない。もうこうなってしまうては、伊藤の事を家族と相談した方がいいのかもしれないけれども、それでは伊藤との約束を破ることもなる。やはり、伊藤と相談してから動くことにしよう。それからでも遅くはないはずだ。とにかく今回は伊藤の体が無事でよかったではないか、それだけでも喜ぶべきである。

そんなことを考えていると、最近の伊藤には本当にいい事がないように思えてきた。伊藤もとことん不幸なやつである。しかし、高橋にはその不幸が自分にも降りかかってきそうな気がした。そうして、これから先のことが不安になった。自分は悪いことはしていない。やはり、正直に言ったほうがいいのかもしれない。心の中でそのような葛藤をしながら、高橋は大家と病院を後にした。

## 第十四話

十四、

その日の講義は、夕方までびっしりと詰まっていた。しかし、伊藤のことを考えていると読書や居眠りもしつくりこない。まるで講義が拷問のようである。早くここを出て、病院へ行きたい。行つて伊藤と話がしたい。医者は伊藤に精神的な問題があると言っていた。おそらく、というか確実にあの事故のことで悩んでいたのである。悩んでいたのなら俺に相談してくればいいものを、あいつは実家に帰るなどと嘘をついてまで俺から避けていた。いったい、なぜなのだ？ もしや、俺を巻き込みたくないがために重荷をひとりで背負おうとしたのかもしれない。とにかく、何かしらあいつなりの考えがあるはずである。昨日入院したばかりで、体はきついかもしれないが、様子を見て今日はそれを聞き出し、これからのことを話し合おう。そんなことを何度も何度も繰り返して考えると、いつの間にか講義が終了した。すると、高橋は急いでバックに教科書などをしまい、小走りで講義室を後にした。

高橋が駐輪場で自転車の鍵をはずしていると、一人の女性が声をかけてきた。

「信君、お疲れ様。」あまりにいきなりだったので、高橋は顔を見るまで誰なのか分からなかった。

「おつ、お疲れ。」顔を見ると、それは直子であった。

「これからどうするの？ よかったら晩御飯一緒に食べない？」

「んー、ごめん。これからちょっと忙しいんだ。」

「珍しいのね、いつも空いてるのに。何の用なの？」高橋は、直子の方こそ今日に限って珍しく深く聞いてくるなと思った。

「いや、大した用ではないんだけどね・・・」高橋は、伊藤が入院していることを話していいものか悩んだ。しかし、入院のことはす

でに伊藤の家族には分かっていることである。しかも、入院のことが分かってからもあの事故のことまでは分かるまい。そうして高橋は話を続けた。

「実は、昨日伊藤が入院して、これから様子を見に行こうと思っているんだ。」

「ええっ、驚いた！本当なの？」

「ああ。」

「それで、なんで入院なんてしたの？」

「まだ、詳しいことは分からないんだ。でも、そんなに重くはないと思うよ。」

「だといけれど、心配だね。私も一緒にいっていいかしら？」

「私もって、今から？」

「そうよ。」直子は、無論といったような顔で高橋を見つめている。

「いや、その気持ちはありがたいけど、今日ばかりはあいつと二人きりで話したいんだ。」

「そんなのずるいわよ。私だって伊藤君のことが心配なもの。減るものでもないし、連れて行って。」

直子が来てしまつては、事故のことを話せなくなる。それではただのお見舞いでしかない。この問題はなるべく早く解決しなくてはいけないのだ。それには、今日二人で話しをするのが懸命であることは言うまでもない。それに、今日の直子はやけにしつこい。しかし、高橋は引いてはならないと思った。

「本当にごめんよ。直子の気持ちも分かるけど、今日ばかりはあいつと二人になりたいんだ。分かってくれるかい？」

「まあ、そこまで言うのなら仕方ないわ。その代わり、今度行く時は一緒に行きましょう。」

「ありがとう。ついでに今度なにかおごるよ。」

「ふふっ。その時はよろしく頼むわよ。」そうして直子の顔が緩んだ。それを見て、高橋もホッとした。

病院までは自転車で三十分程度である。なにも運動をしていない

高橋にとっては、調度いい運動である。それに、病院までの道は普段通らない道なので、どこか新鮮であり、目の刺激にもなった。

病院に着くと、高橋はあることに気が付いた。それはこの病院が大きくてきれいだということである。最近できたばかりなのだろうか、受付や廊下、トイレなどのデザインは病院らしくなかった。これに展示品などが置いてあれば、まるで博物館の様である。中にはエレベーターだけでなく、エスカレーターも設置されていた。病院の中でエスカレーターにのるのは初めてである。このような快適な空間なら、自分も入院して講義を休みたいなあとも思う。

高橋は、受付で伊藤の病室を聞くと、ジューズを二本買って病室へと向かった。暖房が効いた空間にジューズの冷たさが心地よい。病室に着くまでその心地よさを味わい、高橋は伊藤の病室のドアをノックした。けれども、中からは返事がない。

「すみません、入りますよ。」高橋は、伊藤以外の患者を気遣って少し丁寧な言ってみた。

けれども、中に入ると、ベットは一つだけだった。そこに寝ているのはもちろん伊藤である。その時、伊藤はぐっすりと眠っていた。高橋は静かにドアをしめ、枕元へと向かい小さなテーブルの上にジューズを置いた。室内の壁は木で統一されていて、清潔感があり、温かみがあった。

高橋は、ベット脇の座椅子に座ると窓の外を見た。四分の一ほど空いたままの窓からは、レースのカーテンをなびかせながら冷たい風が入ってきていた。しかし、それは気持ちのよいものであった。それに、窓の外には真っ赤に燃えた夕日が見えている。そういえば、自分が夕日をこうやってまじまじと眺めるのは、子供の時以来である。どうして、今までこんなに綺麗なものを見なかったんだろう。晴れの日、毎日ただで見ることもできるのに、写真すら撮ったことがない。高橋は椅子に座ったまま、しばらくの間窓の外を見つめていた。伊藤はすやすやと眠っている。

しばらくして夕日も沈み、街の景色は昼から夜へと変わった。そ

うなると、気持ちよかった外の風もいよいよ寒くなってくる。そうして高橋は窓とカーテンを閉めた。そして、体の向きを変えて伊藤を見ると、伊藤はくるりと寝返りをうった。まあ、睡眠不足という診断だったので疲れているのも無理はないだろう。しかし、このままでは大事な話ができずに終わってしまう。かといって、彼を起こすのも気が引ける。そんな時、病室に看護師が入ってきた。その看護師は、すらりと背の高い女性であった。

「すみません、お邪魔します。」その看護師は高橋に会釈をすると、さらに続けた。

「伊藤さん。晩御飯のお時間ですよ。」

「あつ、すみません。伊藤はまだ寝てるみたいなんですよ。」

「あら、そうでしたか。まあ無理もないですよ。それじゃあ、また後で来たほうがいいでしょうか？それとも、御飯だけ置いていきましょうか？」

「じゃあ、また後でお願いします。」

しかし、高橋がそう言った瞬間、伊藤が目を覚ました。

「あつ、看護師さん。どうやら、伊藤の目が覚めたみたいです。」

「はいはい。」看護師は、半分部屋を出かけていたが、そう言うともた戻ってきた。

「おい、伊藤。御飯みたいだぞ。起きてすぐに食べられるか？」

「・・・。」伊藤は訳の分からないといった様子で、高橋の方を見た。まだ寝ぼけているようである。

「あれ、信ちゃんこんなところで何してるの？」

「何って、お前のお見舞いに来たんだよ。思ったより元気そうであったな。」

「おかげさまで。」高橋の言う通り、伊藤は元気そうであった。昨日の医者は、伊藤が精神的に病んでいると言っていたが、全然そんなことはなさそうである。

「あのー、御飯はどうでしょうか？」と看護師が言った。

「あつ、すみません。」と挨拶すると、高橋は伊藤に質問した。

「御飯はもう食べられるか？」

「うん。食べる。」

「そうか、良かった。食欲はあるみたいだな。」そうして、看護師は、伊藤の前に晩御飯を並べた。晩御飯と言っても、おかゆ等の軽い食事だったが、伊藤はおいしそうに頬張っていた。

## 第十五話

十五、

「病院の食事っておいしくないって聞くけど、どう？」

「いや、そうでもないよ。」と伊藤は本当においしそうに食べていた。

「それで、体の調子はどう？」

「まあ、昨日よりはいいかな。」

「よかったな。」この調子ならまともに話ができそうである。

「それにしても、昨日は驚いたよ。気が付いた時には、腕に点滴を打ちながら、このベットに寝ていたんだぜ。後で担当の医者に聞いたら、お前が運んできてくれたって言うじゃないか。ホント、ありがとな。」伊藤は少し照れくさそうにそう言った。

「なに、困った時はお互い様だろ。それより、なんで実家に帰らなかったんだ？」

「ああ、そのことか。」伊藤は、ためらいながら重い口を開いた。

「帰った方がいいし、帰ろうとも思ってたんだけど、いざ帰るとなると怖くなってきたやつて。それで、この通り帰らずじまいさ。」

「そうだったのか。でも、大学にも来ないで家にひとりでいたらよけい不安になるだろ？」

「ああ、不安だったよ。けど、大学に行くのも怖くなってきて……だから、あまりにも不安になった時には街の雑踏の中を訳もなく行ったり来たりしてたんだ。そうしていると、自分が自分じゃないみたいに見えるきて、楽になるんだ。」

「そんな時こそ俺に相談してくれよ。」

「ごめん、そうすればよかったよ。もしも、そうしていれば、こんなことにはならなかったかもな。」本当はお前に会うのも怖かった。伊藤は心の中でそう思っていたが、どうしても口には出せなか

った。

「まあ、いいや。今はこうして話せてるわけだし。細かいことはなしにしよう。」

「ありがとう。」

「それよりも、大事なものはこれからだ。お前はこれからどうしようと思ってるんだ？」

伊藤は、持っていた箸とお碗をトレイの上に置いた。それから小さな声で次のように言った。

「分からない。」

「・・・」

「どうしていこうかお前に教えて欲しい。」そう言つて伊藤は高橋の目を直視した。

「俺も・・・、よく分からない。けれど、お前の家族にはもう分かつている事だし、やっぱり正直に話した方がいいんじゃないか？」

「俺もできればそうしたいよ。」と伊藤はつぶやいた。しかし、その声は高橋の耳には入らなかった。

「それにしても、警察の捜査は案外でこずっているみたいだな。あれ以来、ニュースではなにもやらないし、警察の動きもないみたいだよ。あまりいいことではないかもしれないけど、あの事故は迷宮入りになるかもな。」

「そうか。」

「とりあえず、家族にはなんて言うんだ？」

「いや、家族は昨日来たよ。」

「えっ、それでなんて言つたんだ？」

「昨日は、まともな話をできる状態じゃなかったから、大した話はしてないよ。」

「そうだな。びつくりさせるなよ。」

「かつてに驚いたのはそっちだろ。」そう言われて高橋も伊藤も笑った。

「じゃあ、今度会った時はどうするつもりなんだい？」



「それはまだ考えてないけど、あの事は言わないつもりさ。というか、まだ言えないよ。」

「そうだよな。まあ、そういうことにしておこう。とりあえず、俺もお前の話に合わせるよ。」

「いつも悪いな。だけど、お前を巻き込みたくないから、ほどほどに頼むよ。」そう言いながら、伊藤は微笑した。

「いいって、俺のことは気にするな。」高橋は椅子から起き上がった。

「俺はそろそろ帰るよ。お前とも話せたし、お前が晩御飯食べてるの見てたら、俺も食いたくなってきた。」

「もう帰っちゃうのか？」

「ああ、それじゃまた来るよ。」

「おう、またな。ありがとう。」

伊藤は想像以上に元気だった。しかし、それよりも気になるのは、想像以上に話がスムーズにいったことである。あれだけ悩んでいたであろう伊藤が、あれだけ病んでいたであろう伊藤が、どうしても落ち着いて会話ができたのだろうか？今日は医者と話していないため、伊藤の体の具合は分からないが、見た感じにも問題はなさそうである。これらのことはいい事であるが、それまで起きていたことと比較すると、どうも腑に落ちなかった。

まあ、明日の風は明日吹くとも言う。長い目であいつを見守っていいくでしょう。それだけのことをする価値はある。あいつは俺にとつてそれだけ大きな友達なのだ。

## 第十六話

十六、

次の日、大学の講義は、朝から夕方までびっしりと詰まっていた。他の学生はともかく、高橋にとっては読書と居眠りの時間であるが、さすがに一日中座っているというのは大変である。そのため、講義が終わると軽い脱力感におそわれた。そして、直子や他の友達の誘いを断り、高橋は一人家へと帰った。

最近忙しかったせいか、家の中は強盗が入ったようにちらかっている。壁と床の境目や隙間には、どこから来たのか、埃がたまっている。トイレや風呂場、洗面台においては赤や黒のカビたちの住家となっている。第一、部屋の中には服や新聞、雑誌などが散乱しており、歩くのがやつとである。かといって、高橋は掃除ができない訳ではない。むしろ、綺麗好きであり、掃除で体を動かすのは好きな方である。

風呂場のカビや床の埃を根こそぎとってしまうところを想像していただきたい。これほど気持ちが良いことはないだろう。けれども、今の高橋には、それらを楽しむ気力はなかった。せいぜい散らばった雑誌や新聞をまとめるのが精一杯である。

それから、高橋はベットに横になった。天井を見ると一匹の八工が飛んでいた。いつもならその命を頂戴するところだが、今日ばかりは八工の運の方が良かった。その八工は、部屋中をさまようと電球に止まった。それはただ羽を休めているだけなのか、それとも電球の温かさがたまらないのか、はたまた明るいのが好きなのか、理由は分からないが、その場に落ち着いたようだ。しかし、八工は高橋を馬鹿にするかのようにまた部屋中を飛び始めた。なんの目的があつて飛んでいるのか、そもそも八工が生きている意味などあるのだろうか。そんなことを考えていくと、人間はどうかという壁にぶ

ち当たる。はたして人間はどうなのだろうか。

元来、生物というものは自分たちの子孫をいかに残すかを競って生きてきた。それならば、生きる意味というのは子孫を残すことだといえよう。ほとんどの動植物たちはそうして生きている。それも本能的に。しかし、人間も同じかと言うと、一概にそうとも言えないだろう。人間の中には一生子を儲けない者もいる。また、子孫を残すだけでなく、趣味を楽しんだり、文明の発展に貢献したり、生きる目的は一つではない。さらに、自殺したり仲間を殺したりするのも人間特有の行動である。その行動は、生物の生きる目的と根本的に矛盾する。我々はいたい何者なのだろうか？我々はこれからどこへ向かおうとしているのだろうか？これは哲学である。そして、難しいことを考えていると眠くなるものである。高橋は、ハエの羽音を聞きながら、いつの間にか寝入ってしまった。

それからどのくらい経っただろうか、高橋の部屋にはチャイムが鳴り響いていた。高橋は、こんな時間に誰だと思いつつ、ベットから身を起こした。それから、ドアの穴を覗くと高橋の眠気はいつきに吹き飛んでしまった。ドアの向こうに立っていたのは、新聞の勧誘でもなければ、宗教の勧誘でもない、伊藤の両親である。高橋は、写真で見ただけで実際に会ったことはなかったが、なぜかピンときた。

高橋が無言でドアを開けると、

「こんにちは。どうもお邪魔してすみません。高橋君ですよ？先日はどうも。私は隆の父です。いつも隆がお世話になっています。」

やはり、高橋の予想は当たっていた。大方、伊藤のことで何か話があるに違いない。

「いえ、こちらこそ。それより、どうぞ中へ。」そう言うと高橋は二人を招き入れた。

「それでは失礼します。」と二人は抵抗なく中へと入っていった。

無論、高橋の部屋は散らかっている。三人どころか一人座るのがやっとである。

「すみませんが、大分部屋が散らかっているので他の場所で話をしましょうか？」高橋は仕方なくそう提案した。それは礼儀で言ったのではなく、本心で言ったのだ。

「いえ、そんなに長居はしないので充分です。」と伊藤の父親が答えた。伊藤の母親は会ってから黙ったままだである。

それでは、と高橋はおおざっぱに辺りを整理し、なんとか三人が座れるだけのスペースを確保した。それから、父親が口を開いた。

「今日来たのはもうお分かりだと思いますが、実は伊藤のことであなさに聞きたいことが・・・」

「はい、なんででしょう？」高橋の部屋の空気は、いつきに重々しいものとなった。

「この間、家に電話をくれましたよね？それと隆を病院まで運んでくれたのもあなただと聞いています。」

「はい・・・」

「ありがとうございます。そこで、あなたとうちの隆は特別仲がいいと思ひまして、あなたが何か隆のことで知っていることがあったら教えて頂きたいのです。」

「確かに仲はいいですが・・・」高橋は返答に躊躇した。

「実は、今日・・・」と父親が言いかけると、母親はそれを止めるかのように夫に目で合図をしているようだった。しかし、父親はそれを遮り、次のように続けた。その間、母親は下を向いているばかりである。

「実は、今日隆が病室で狂乱しまして、自分の頭をベットのパイプなどに激しく打ち付けたみたいなんです。医者によると、隆は幻覚を見たらしいのですが、親としては信じがたいのです。それで、先ほど病院に行ってきたのですが、どうやら本当のようで・・・」

「本当ですか？」高橋は思わず聞き返してしまった。母親の面持ちには、先程に増して暗くなった。

「ええ・・・、そこであなさに聞きたいんです。最近の隆の行動等を。」

高橋は困惑した。なぜなら、高橋も同じようにあの事故のこと意外、最近の伊藤の行動が分からないからだ。ただ、ここであの事故のことを打ち明けても大きな変化はなさそうである。なにか、高橋も知らないことが伊藤を包み込んでいるに違いない。高橋は、これは厄介なことになってきたと思った。

「何か心当たりはないですか？」父親は一生懸命である。

「申し訳ありませんが、ありません。」そう言つて、高橋は頭を下げた。

「そうですか・・・」伊藤の両親は肩を落とした。それから母親が始めて口を開いた。

「あの子は、根は真面目なんです。なので、狂乱したということは今でも信じられないんです。あの子は、私たちだと本当のことを話してくれません。けれど、あなたなら違うでしょう？だから、今度隆に会つて話をして欲しいの。よろしいですか？」

「もちろんです。少し時間がかかるかも分かりませんが、頑張ってみます。」

「よろしくお願いします。」そう言つと、二人は菓子折りを置いて高橋の家を後にした。

## 第十七話

十七、

次の日、高橋は悩んでいた。その悩みの種は直子である。一昨日は、一緒に伊藤のお見舞いに行くことを約束してしまったし、昨日は昨日で晩御飯の誘いを断ってしまった。今日は、必ず伊藤と話をしなくてはならない。かと言って直子を連れて行くのは気が引けるけれども、約束は約束である。男である以上、一度口にしたことは死んでも守らなければならない。そう思い、高橋は直子を連れて行くことにした。

直子は、俄然うきうきしていた。病院に着くと高橋もそうであったように、その大きさと綺麗さに驚いているようだった。

「はじめて来たけど、本当に綺麗な病院ね。」

「まあね、俺も最初は驚いたよ。」

「信君はここに来るのは何回目？」

「えーっと、二回目・・・いや、三回目かな。」最初高橋は、伊藤と救急車で来た日を数えるのを忘れそうになった。

「もうそんなに来てるんだ。」

そんなことを話しているうちに、伊藤の病室の前に着いた。

「ここが、伊藤の病室だよ。」と高橋はドアを指差した。

そして、軽く三回程ドアをノックすると、恐る恐るドアノブをひねった。向こうの空間には、どんな伊藤がいるのだろうか。不安はあったが、今日は直子もいたので少し強気になれた。こればかりは直子に感謝である。

「伊藤、入るぞ。」

「失礼するわよ。」と直子も声をそろえた。

「おう、今日は二人でどうしたの？」伊藤はベットに腰掛けながら外を眺めていたようである。こちらに振り向くと、そう言ってさわ

やかな笑顔を見せた。しかし、頭には包帯がぐるぐるに巻かれ、上からネットが被せてあった。おそらく、狂乱した時の傷だろう。

「今日は、直子も来たいっていうから連れてきたよ。」

「どう、体の調子は？」と直子は伊藤のそばに歩み寄った。

「心配かけてごめんね。今日は大分いい感じだよ。」

「そう、それなら良かった。」直子は微笑すると、さらに続けた。

「それにしても、最近大学は来ないし、どうしたの？」

「ははっ、たまにはさぼりたい時もあるだろ。」と伊藤は頭を撫でながらそう言った。

「まあ、そういう細かいことはいいだろ。」と言いながら高橋も伊藤の近くに歩み寄った。

「それもそうね。とりあえず、今は体を治すことが先決ね。」そう言って直子は納得したらしかった。

どうやら、今日の伊藤の精神状態は安定しているようである。けれども、この状況ではまともに話をする事ができない。直子にあの事故のことを話せば楽になるのだが、伊藤の手前、そんなことはできない。しかし、自分がやらなくてはいつまでもたっても解決しない。そう思うと、高橋は自分を奮い立たせた。

「そういえば、この部屋暖房がついていて、のど渴かないか伊藤？」

「んん、言われてみれば少しのど渴いたな。みんなでなにか飲み物買いに行こうか？」

「それいいね。行こうか。」と直子ものつてきた。

「いやいや、病人は静かに寝てなくちゃ駄目だよ。」

「それもそうね。」と直子はどっち付かずである。

「確かにそうだけど、お前が言うほど病人じゃないぞ。」と伊藤は不満そうである。

「まあまあ、飲み物は俺が奢るから。」

「仕方ないな。」それならと伊藤は納得したようである。

「俺が奢るから、直子買ってきてもらっていいかな？」

「いいわよ。その代わり、ちゃんと奢ってね。」

そうして、高橋は直子に五百円玉を渡した。

「お釣はいいよ。」

「なんか今日は気前がいいのね。それで、二人とも飲み物は何がいい？」

「俺は、何かさっぱりしたもの。」

「信君は？」

「俺は、炭酸が入ったやつならなんでもいいよ。」

「はい。」と言って直子は元気よく部屋を出て行った。

高橋は、やっと伊藤と二人きりになれたと思った。しかし、ゆっくuriとしている暇はない。直子が飲み物を買ってくる前に話を済ませなければならぬ。そうして高橋は口を開いた。

「その頭はどうしたんだ？」

「ああ、昨日その階段で転んじやってね。」

「おいおい、俺に嘘は通用しないぞ。転んだくらいでそんなになるか？」

「なる時もあるのさ。すごい転び方だったんだぜ、思わず……」

高橋は、伊藤の話が終わらないうちにこう言った。

「実は、昨日俺の家にお前の両親が来たんだ。」

伊藤は少し沈黙を置いてから口を開いた。

「そうだったのか。」

「どうして、そんなことをしたんだ？」

「俺にもよく分からない。今は落ち着いているけど、見えるんだよ。」

「

「はっ？ いったい何が見えるんだ？」

「……」

「おい、俺には何でも話してくれよ。あの事を知っているのは、お前と俺だけなんだぞ。話して楽になった方がいいじゃないか。そう  
だろ？」

またしても伊藤は沈黙を置いた。それもさっきより長い沈黙を。

「蛆虫が見えるんだ。それも体中に……。頭についたそいつらは



俺の鼻や目から脳の中へと入り込んでくるんだ。俺の脳に寄生するために。だから、俺はそれを振り払うのに必死だった。最初のうちは手やシートで体中を擦ってみたけど、あいつらは際限なく湧き出てくるんだ。それで、頭に入り込んだ蛆虫たちを追い出すために頭を打ち付けたんだ。そうしたら、あいつらは堪らず口から飛び出してきたんだ。だけど、あいつらはいくら振り払おうとしてもきりがない。これは夢なんかじゃない、かなりリアルな話さ。」

「・・・」高橋は絶句した。

「おかしいだろ？でも実際本当のことなんだ。」

「それは医者に相談したのか？」

「もちろんしたさ。」

「医者は何て？」

「幻覚みたいだ。」

「原因はなんだって？」

「原因は・・・」と伊藤が言いかけたところで直子が戻ってきた。

「おまたせ。」

「ありがとう。」と二人は言った。直子が帰ってくると、伊藤の表情も少し明るくなった。

これで、伊藤と高橋の会話は終りである。もっと話をしたいところだが、もう直子を使うわけにもいかず、三人で普通の会話をした後、病室を後にした。おそらく、伊藤は今日も蛆虫に食われる幻覚を見るに違いない。はたまた、もっとひどい幻覚を見るのかもしれない。その原因までは聞けなかったが、その真相には深いものが隠れていそうである。いったいあの事故の後、伊藤に何があったのだろうか。すぐ隣で自転車をこいでいる直子には、高橋と伊藤が悩んでいるなどと思いもしないだろう。直子は、街に飾られたイルミネーションを見ながら、何か高橋に言ってきているようだった。しかし、その声は高橋には届かない。唯一、高橋が感じ取れるのは、憂うつな気持ちと、もう夜になったということだけであった。

## 第十八話

十八、

高橋と直子は、大学近くの喫茶店でお茶を飲んでいた。昼間なのに店内は薄暗く、ずっとなかっていると、いつい時間忘れてしまいうそである。しかし、客が入ってくるたびに漏れる外からの光が、今は昼なのだと知らせてくれる。入ってくる客のほとんどは学生であると思われる。それに混じって、サラリーマンやOLの人たちが団体で入ってくることもあった。こうして人を観察していると、悩んでいるのは自分だけのように思えてくる。それは、自分が人の痛みを理解できないせいだからだろうか、それとも疲れているせいなのだろうか？今の高橋にその結論を出す余力はなかった。

「伊藤君が信君に会いたがってたよ。」

「えっ？会いたがってたって、あれから伊藤に会いに行ったのか？」  
実は、高橋と直子がお見舞いに行ってからもう一週間が経ったのだ。その間、高橋が伊藤に会いに行かなかったのは、会うのが怖かったからである。

「彼、ひとりで寂しそだったよ。」

「そうか、それでいつ会いにいったんだい？」

「確か、三日ぐらい前だったかな。」

「一人で？」

「ううん、友達と。」そう言って直子は首を振って見せた。

「あいつの様子はとうだった？」

「ちょっと痩せたかな。あと、頭に包帯もしてた。」

やはりと思いながら、高橋はミルクティーを口に運んだ。実際そのミルクティーは美味しい物なのだろうが、特に美味しいとも感じられなかった。ただ、喫茶店に入ったから飲む、それだけのことがある。

「他に変わった様子はなかったか？」

「えっと、全体的に疲れている感じだったけど・・・まあ、とにかく、信君に会いたがつてたよ。」

「そうか・・・」

「なんで、会いに行かないの？」

「最近、忙しいんだよ。でも、そろそろ時間をつくって行くつもりさ。」

忙しいというのは嘘である。けれども、本当は高橋も伊藤と話をしてほしいのだ。あの時の話もいいところで切れてしまっている。あいつが会いたくないと言っているならまたしも、あいつは会いたがつているのだ。そう考えると、あれから音信普通になつてしまつのは、不人情であろう。いくらあいつと会つのが怖いからとは言え、いつかは合わねばならない。それに、他の人に知れる前に早く話をつけて置くべきなのは言うまでもない事だ。

「なるべく、早く行つてあげてね。何か話したいことがあるつて言つてたから。」

「話したいこと？伊藤がそう言つてたのか？」

「もちろんそうよ。」直子は、キョトンとした目で高橋を見つめている。高橋はミルクティーを口へと運ぶ。

「それなら、これから行つてみようかな。」高橋は独り言のようにつぶやいた。

「うん、それがいいかも。」

「じゃあ、そうするわ。でも、今日は一人で行つてもいいかな？」

「私はこの前行つたからいいわよ。」

「おう、ありがとう。」

「ありがとうつて、別に私は何もしてないわよ。」

「ははっ、それもそうだ。」

そんなやり取りを終え、二人は店を出た。店の外はまだ昼である。向かいの道路は、信号を待つ人々でごみごみしていた。こんな寒い日に、みんなよく出かけるものである。自分は、伊藤が入院などし

ていなかったら、真っ先に家に帰って布団に包まり寝ていることだろう。

「それじゃ、またね。」

直子は手を振りながら去っていった。高橋は手を小さく振るだけで声は出さない。そして、高橋は布団に包まりたい気持ちを抑えながらひたすら自転車をこいだ。

もう四回目のせいにか、この病院がやけに近く感じられた。それに、綺麗で大きいといった印象もだんだんと薄れてきたようだった。人間の慣れというものは怖いものである。こんなにも人の感覚を麻痺させてしまうのだ。どうせ麻痺させるなら、このストレスを麻痺させて欲しいものである。しかし、ストレスというものは堪る一方で慣れるといった事は聞いた例がない。結局、人生というのはいい事が一瞬で、残りは悪い事で埋め尽くされているのだ。高橋は、住みにくい世に生まれてきたものだと思った。

そんなことを考えていると、もう伊藤の病室の前だった。駐輪場から病室までの距離は、ちょっとした考えをまとめるのに調度いい距離なのだ。

「伊藤、入るぞ。」と高橋は気を使うことなく中へと入った。

「おお、久しぶり。」伊藤は笑顔で迎えてくれた。

「ごめん、ごめん、最近忙しくて。元気だった？」

「そこそこね。」

「それなら良かった。」と言いつつも、高橋は伊藤のやつれた顔を見るのが痛々しかった。それから高橋は続けた。

「なんか、直子が来たみたいだな。」

「ああ、来た、来た。結構大人数で来たよ。」

「大人数って何人くらい？」

「五人ぐらいだったかな。」

「悪いな、騒がしくしちゃって。」

「いやいや、お前が謝らなくても。それに、賑やかな方がいいときもあるんだよ。」

今日の伊藤は、いつもの伊藤に一番近いように感じられた。そのためか、どこことなく話しかけやすい気がした。

「まだ、頭の包帯取れないみたいだけど、あれからどうなの？」

「どうなのって？」

「だから、幻覚とかはないのか？」

「いや、あれはなくならないよ。昼間はある程度落ち着いてるんだけど、夜になって一人になると起きやすいんだ。前ほどではないけど、それでも二日に一度は必ずなるんだ。」

「・・・」こんな時、高橋は何と返せばいいのかわからない。

「でも、今日はお前が来てくれてうれしいよ。」

「おいおい、来て欲しければいつでも来るぜ。」

「ありがとう。思えば、俺は友達多いけど、ここまでしてくれるのはお前だけだな。俺は大してお前に何もしてやったことはないのに、本当に申し訳なく思うよ。」伊藤の目は少し潤んでいた。ベットに横たわる姿は、まるで老人のようである。

「そんな水臭い事言うなよ。お前らしくないぞ。」

「ごめんよ。」それから伊藤は一呼吸置き、高橋を見つめるところと言った。

「今日はお前に話しておかなくちゃいけないことがあるんだ。これ話をしておかなくちゃ、俺は死んでも死に切れないと思う。これまでに起きていた事をここで全て打ち明ける。」伊藤の目は、その様相に反して力強く燃えていた。

## 第十九話

十九、

「その話ってなんだ？」高橋は息をのんだ。伊藤は横たわったまま、顔だけは高橋の方を向いている。

「いいか、よく聴いてくれ。」

「おう。」

伊藤は、一呼吸置くと話し始めた。

「まずはお前に謝らなければいけないことがある。」そう言って、伊藤は目線を高橋から天井に移した。

「謝る？」

「そうなんだ。実はあの事故以来、誰にも言っていないことがあったんだ。もちろん、お前にも・・・、だからまずは隠していたことを謝りたい。本当にごめん。」

「別にいいんだよ。それより、話の続きを聞かせてくれ。」伊藤は高橋の対応が意外だったのか、また目線を高橋の方へと戻した。

「ありがとう。そういつてもらえるとうれしいよ。」そう言って伊藤の話が始まった。

「実は、俺は薬物中毒なんだ。」高橋は驚きと同時に何か言おうとしたが、伊藤はそれを遮り、話を続けた。

「おそろく驚いたと思うし、信じられないと思う。けれど、質問なしで最後まで聴いて欲しいんだ。それと、これから話すことは、全て本当の話だからな。もし、聴きたくなければそれでもいい。」

「分かった。」そう言うが高橋はベットの脇の椅子に座った。

「最初に言った通り、俺は覚せい剤に侵されている。それも、あの事故の前からなんだ。だから、あの事故を起こしたのも覚せい剤とそれを使った俺のせいさ。始めは軽い気持ちだった。少しだけなら止められる。まさか、自分がそれに依存するようになるなんて、そ

んな軽い気持ちだったんだ。今思うと、それがいけなかった・・・  
今から二ヶ月ほど前、俺はひとりで駅周辺の路地裏を歩いていた。  
しばらくふらついていると、三人組の男が円字を組んで、地べたに  
座り込んでいたんだ。年は全員二十代ぐらいで、髪型や服装等はい  
かにも不良といった感じの奴らだった。そこで、俺が足早に横を通  
り過ぎようとすると、一人の男が俺を見て声をかけてきた。もちろ  
ん、俺は無視して通り過ぎようと試みた。けれど、奴らの一人が俺  
の左腕をつかんだ瞬間、俺の希望は絶たれたんだ。

無論、俺は拒み続けたさ。しかし、最後には奴らにのせられて少  
しだけ覚せい剤を打った。お前は分からないだろうが、打った後の  
快感といったら、まるでこのまま天国に行けるような、または自分  
にはなんでもできるといったような気分になれるんだ。その気分が  
いつまでも続けばいいのだが、そうはいかない。しばらく覚醒する  
と、今度は激しい苦痛が襲ってくる。覚醒が天国なら、覚醒後は地  
獄と言ってもいい。その地獄はまるで砂漠のようで、俺ののを力  
ラカラにするんだ。そして、覚せい剤という名の水を異常に欲する  
ようになる。それから、俺は、定期的にあの三人組のところに通う  
ようになり、現在に至るわけなんだ。

それに加えて、自分だけならまだしも、俺は人を殺してしまった。  
あの事故の日も俺は覚せい剤を打ち、いい気分になったところでド  
ライブしていた。自分でもぞっとするが、あの時人をひいた感覚は  
最高に気持ち良かった。そして、あの事故の後も、俺は覚せい剤を  
打ち続けた。悪いとは分かっているが、俺は止められなくなってい  
たんだ。もちろん後悔もしたが、すでに自分ひとりの力ではどう  
にもならなくなっていた。けれど、この病院に入ってからとはそんな  
ことはできない、俺のことを思ってお見舞いに来てくれる人たちが  
いる。だから、これを機会に俺はなんとか立ち直りたい。そう思っ  
て、お前には話を聞いてもらいたかった。俺は最低な人間さ。そう  
思われたとしても構わない。今の俺には、捨てるものなんて残って  
ないしな。だけど、お前にだけは見捨てられたくないんだ。俺の話

「はこれで終りだ。」そう言うと伊藤は目を閉じた。閉じた目からは涙がこぼれ落ちていた。

「そんなことがあったのか。」

「ああ・・・」

「お前はこれからどうしたいんだ？」

「俺は俺なりに罪滅ぼしをしたいと思ってる。」

「俺は何をしてやればいい？」

「お前は見守っていてくれるだけでいい。それで十分だ。」

「分かった、心配するな。俺は、いつでもお前のみかただからな。」

「ありがとう。」伊藤は涙で濡れた目を開いた。高橋はそれを見ないように、窓の外を見つめた。

「俺の方こそ、正直に話してくれて礼を言っよ。」

「・・・」

「確かに、今までのお前の行動には問題があった。けれど、ここは病院だし、お前の考えもまとまっているようだから、俺はお前を信じるよ。」

「もうお前はゆっくりしてくれ。俺のことは構わなくていいさ。」

「そう言って伊藤は高橋の方を見た。」

「そうもできないが、実態が分かって少し安心したよ。」

「俺はここで罪滅ぼしをするよ。」

「頑張ってくれ。きつと時間が解決してくれるさ。」

「ああ、今日はありがとう。すつきりできたよ。こんな話をいきなり聴かされて、今日は疲れただろう？」

「少しな。でも、もう慣れてきたよ。」

「ははっ。」高橋は伊藤の笑顔を久しぶりに見ることができた。

「それじゃ、俺はここら辺で失礼するよ。いいか？」

「もちろん。今度は直子の面倒を見てやってくれ。」

伊藤は布団の下から手を出して、できる限りの力を振り絞って天井に突き上げた。高橋はそれに応えたが、その腕は青年の腕とは思えないくらいに貧弱で、見るに耐えなかった。その時、高橋の頭の



中には、まだ元気だった頃の伊藤との思い出がよみがえってきた。大学に入ってから仲であるから、それほど長い付き合いではないが、二人の間には切っても切れない何かが出来上がっていたのだ。ややもすると、その何かは、直子でも切れないほど丈夫かもしれない。この時、高橋はそう実感した。もうあの頃には戻れないのだろうか？そう思うとなんだか目頭が熱くなってきた。

## 第二十話

二十、

高橋は、涙をこらえながら病院を後にした。西の空には夕日が沈もうとしている。

今日は伊藤の話を聴いて、とうとう、その実態が明らかとなった。その内容は驚愕すべきものであったが、高橋は案外冷静だった。それは、長く歯の隙間に詰まっていたものが取れたような気分似ていた。もちろん、ここであの事故が解決したわけではないが、解決に至る大きな一歩を踏み込んだことは確かだろう。しかも、今日の伊藤を見るぶんには、良い方向に解決していきそうである。高橋はそう確信した。

しかし、この不祥事をきっかけに、伊藤は大学を退学することは間違いないだろう。もし、あの事故がばれなかったとしても、それは免れないはずだ。まあ、それは仕方のないことであり、その方が伊藤のためにもなるだろう。それに、伊藤が退学しても、高橋と伊藤の関係は変わらない。むしろ、今回の事を期に、二人の友情はより強く美しいものになっただろう。

そんな事を考えていると、高橋はふとあることに気付いた。それは直子との関係のことだ。そういえば、直子と付き合い始めて約半年が経つが、自分がなぜ直子と付き合い合っているのか疑問に感じた。もちろん、高橋は直子の事が好きである。直子のどこがいいのかも分かっている。それなのに、伊藤に対するような激しい心と心のぶつかり合いを感じた事はなかった。はたして、男女の仲にそのようなものが必要なかは分らない。けれども、高橋にはそれが必要だった。もし今、伊藤と直子のどちらを選ぶかと聞かれれば、高橋は迷わず伊藤を選んだ。

自分はなぜ直子と付き合うのだ？そもそも付き合うということは、

何を目的とし、何を意味するのだろうか？この場合、男と女の関係は友達の関係とは異なる。しかし、共通する部分も少なくはないだろう。高橋がそれを理解するにはまだ若過ぎた。

今日の高橋は特に疲れ、腹も減っていた。そのため、直子のことを考える事はよしにして定食屋に入っていた。のれんをくぐると、中には温かい雰囲気が漂っていた。そして、高橋が入るやいなや、白い割烹着を着たおばさんが、「いらつしゃいませ。」と大きな声で出迎えてくれた。客は高橋一人であるが、狭いせいか違和感はない。汚れた壁にはビールのポスターが貼っており、小さな本棚にはマンガや雑誌が乱雑に積み重なっていた。冗談にも綺麗とか高級といった言葉が似合う店ではないが、おばさんは親切そうであり、高橋の嫌いな店ではなさそうだった。その親切そうなおばさんは、高橋に水を運んできた。

「どうも、決まりましたらまた呼んでください。」

「じゃあ、とんかつ定食をお願いします。」

「はい、とんかつ定食ですね。」そう言うと厨房の方へと向かって行った。

厨房には、頭に黄色いバンダナを被り、眼鏡をかけた中年の男が立っていた。そして、注文を受けるとエプロンのひもを結び、準備に取り掛かったようだった。おそらく、夫婦で経営しているのだろう。それから、厨房をよく覗くと、その夫婦の足元には、なにかふかふかしたものがあふのに気付いた。どうやら、犬のようである。体は無駄に大きく、毛並みは一級品である。まるで、ぬいぐるみのようだ。食堂の厨房に犬がいるのは、衛生上あまりいいことではないが、別段取り立てて言う事でもないのもそれきりにした。

「お待たせしました。とんかつ定食です。」

「どうも。」

「御飯は大盛りにしましたけど、足りなかったら遠慮なくおかわりして下さいね。」

「はい。ありがとうございます。」

それから、そのおばさんはまだ話したそうだったが、高橋がさっそく食べ始めたのを見ると、おとなしく厨房の方へと戻っていつてしまった。高橋もその気使いをありがたく思い、おかわりもしながらもっぱら食事に集中した。

腹もたまり、店を出ると、外はもう真つ暗であつた。その上、最近は風も強く、寒さはいつそう厳しくなつていた。今日は早く家に帰つてこたつで温まろう。そんな事を考えていると、目の前を柄の悪い三人組が通り過ぎた。三人とも煙草を吹かし、だらだらとしたリズムを刻みながら、伊藤の言つていた裏通りの方へと歩いていった。これはもしかすると伊藤の言つていた三人組かもしれない。年齢や様相から見ても、その確率は低いとは言えない。そう思うと、高橋はなにかに吸いつけられるようにその三人の後を追つて行つた。

三人は、途中コンビニに寄つて何か買い物をしたらしかったが、最終的には伊藤の言つていた裏通りで足を止めた。それから、少し様子を見てみると、その三人の輪の中に高校生らしき青年が交ざつてきた。その青年の体裁は、制服を着ている以外、三人とあまり変わりはない。

青年が財布から金を出すと、それと引き換えに三人の内一人がなにかを手渡した。青年は、三人の輪に囲まれていたのでよく見えなかったが、伊藤の話を聴いたせいか、高橋にはそれが薬物だとは思えなかった。そして、その取引が終わると、青年は足早にその場を去つていった。高橋は出て行くのは気が引けたので、その場でもう少し様子を見る事にした。

高橋が様子を窺い始めてしばらく経つた頃、三人のもとには暴力団とも見て取れる男たちが歩み寄つてきた。人数は五六人ぐらいであろう。高橋の所からは大分離れていたので、何を言っているのかはよく聞き取れなかったが、売り上げはどうだとか言つていたように聞こえた。同時に、三人はその男たちに深々と頭を下げていた。そして、話が終わるやいなや、男たちは街の繁華街へと姿を消していった。

ここまでの様子を見る限り、あの三人は伊藤の言っていた人たちにほぼ間違いはないだろう。そう思うと高橋は鳥肌がたった。自分の目と鼻の先に親友を泥沼へと引き込んだ張本人がいるのである。しかも、地べたに座りながら耳ざわりな笑い声でけらけらと笑っているではないか。高橋はそれを見ていると無性に腹が立ってきた。

## 第二十一話

二十一、

高橋は鋭い眼光で三人を凝視していた。三人はそれとは知らずに、げらげらと笑いながら談話にふけっている。高橋の体には、自然と力が入った。そして、体の中でめらめらと何かが燃え盛るのを感じた。すると次の瞬間、高橋は身を乗り出し、その鋭い眼光の先へと向かっていった。その通りには高橋と三人の姿しか見当たらない。高橋は三人のいる方へと歩み寄っていった。その距離はじりじりと縮まっていく。高橋が大分近づいたころ、三人のうちこちらに体を向いていた一人が気付いた。それから、三人はその場で立ち上がり、全員が高橋の方に体を開いた。そして、高橋を見ながらにやにやと気持ち悪い笑みを浮かべていた。

案の定、高橋が横を通り過ぎようとすると三人は高橋に話しかけてきた。そして、あつという間に高橋は三人に囲まれた。三人の身長はみな高橋より高く、近くで見ると威圧感があった。しかし、今の高橋にはそんなことは関係なかった。むしろ、三人を前にして感情は高ぶるばかりである。

「お兄さん、安くしとくから一つどう？」と話しかけてきた男の息は煙草臭かった。

「・・・」高橋は話しかけてきた一人の顔を見た。見たというよりは、睨んだと言った方が正確かもしれない。

「おい。こいつ何もしやべらないぜ。」

「びびってんじゃねえのか。」

「おまえらもう少し言葉を選んでしゃべれ。」と一人が二人の態度をたしなめた。それから、その男が続けた。

「すみませんね。こいつら口が悪くて。それで、どうですか？安くしときますよ。もちろん品質もいいです。」

「・・・」高橋は依然として黙ったままである。それを見て、先程の二人はいらいらしているようだった。

「こいつ全然しゃべらねーじゃねえか。」

「おい。買うのか買わねえのか、はつきりしろや！」

「・・・」

「ばかやろー、おまえらは下がってろ。まともに話もできねー。」  
とまた一人がたしなめた。いずれにせよ、三人はイラついているようである。

「すみませんね。こいつらのことは気にしないで。それで、どうしますか？いくらならいいですかね？」

「なんの話ですかね？さっぱり分かりませんが・・・」それを聞いて先程の二人はげらげらと笑い出した。

「そんな事も知らねえで、ここを歩いてたのか。」

「はっはっはっ、めでたい奴だな。」

「俺たちはSを売ってるんだ。お前やったことないだろ？最高だぜ。少しかけなら大丈夫だからやってみるよ。今日だけ半額にしようというやるよ。」Sとは覚せい剤のことである。

「・・・」高橋の怒りは爆発寸前であった。こいつらが伊藤を・・・。

「おい、どうすんだ。」

「・・・」

次の瞬間、高橋は目の前にいた男の顔面を思い切り殴った。そして、ゴツツという鈍い音と大きな奇声と共にその男は後ろに仰け反り、その場にひざまずいた。顔面を押さえた手の隙間からは血が滴り落ちていく。その男は声もでないほど痛いのか、その状態のまま動こうとしない。しかし、目だけはしっかりと高橋の方を向いており、力強く睨んでいた。高橋は睨みかえすと二人の男たちにも殴りかかった。しかし、一発目とは違い、拳は顔面を外れた。次に蹴りを入れると、高橋の足は相手のわき腹に食い込んだ。それを食らった相手は、渋い顔をしながら背中を丸めた。それから高橋は、一心

不乱に相手の体へと激しい打撃を繰り返した。最初に鼻を折られた男にもう一度蹴りを入れると、その男は気絶してしまった。そんなことは気にも止めず、高橋はひたすら打ち続けた。

けれども、相手は男三人である。まだ意識のある二人は、一瞬の隙をつくと高橋の顔面めがけて頭突きをしてきた。思わぬ攻撃に高橋はそれをまともにくらい、顔面を手で押さえた。幸い鼻の骨は折れていないようである。それからいつきに形勢は逆転し、高橋は、一方の男に取り押さえられ、もう一方の男に激しい打撃を浴びせられた。辺りにはドスツ、ドスツという鈍い音が鳴り響く。

皆さんはご存知だろうか、人間が強打されるとき音を……。映画やドラマではスカツとするような効果音で表現されているが、実際の音はもつと鈍い音なのだ。むしろそれは音ではない。音と言うよりは、感覚である。相手を殴ったときに感じる肉片を叩き、骨を砕く様な鈍い感覚だ。しかも、人間の体は映画とは違い、非常にもろいものである。素手で殴られれば、二三発でよろよろになってしまう。すでに高橋も服が血だらけになっていた。

高橋は全身を強打された。ある場所を殴られ、痛いと感じた次の瞬間には、もう違う場所を殴られる。前の痛みが止まないうちに次の痛みが襲ってくるのだ。そのうちどれが痛みなのかも分からなくなってくる。それから、どうして自分がこんなことをしているのかも分からなくなってきた。自分はなぜ殴られているのだろう？もしかしたらここで死ぬのかもしれない。しかし、またそれもないのかもしれないと思った。

しばらくすると、二人の男は、意識を失った男を担いで、いきなりどこかへと去っていった。無論、高橋は反撃する事などできない意識を持っているだけでも精一杯だった。高橋が激しい痛みに耐えていると、警官が二人やってきた。どうやら、騒ぎを聞きつけてやってきたようだ。

「大丈夫ですか？」話しかけてきたのは、中年の警官だった。もう一方の若い警官は、その隣で興味深そうに高橋を見つめていた。



「はい・・・」

「いや、かなり出血してるじゃないか。ちょっと待っていてください。すぐに救急車を呼びますから。」そういうと、警察官は救急車を呼んだ。

「いったいどうしたんですか？」と若い警官は声をかけてきた。

「ちょっと不良の喧嘩に巻き込まれて・・・」と高橋はとつさに嘘をついた。

「そうですか、お気の毒に・・・とりあえず、体がよくなってから詳しい事を聞かせて下さい。」

「分かりました。」

高橋は呼吸に違和感を覚えた。激しい痛みに気がいつていたが、じっくりと自分の体の感覚を確かめると、脱力感や嫌悪感も感じられた。それに力を入れようとしても、思うように力が入らない。まるで自分の体ではないようである。高橋は、中年の警官の体に身を委ね、救急車が来るのを待った。待っている間、警官の征服の煙草の臭いが心地よかった。いつもなら不快に感じるこの臭いも、なぜか今は心地よく感じられた。

## 第二十二話

二十二、

病院での診察結果によると、高橋の肋骨には少しひびが入っていた。それと、全身を強打されたせいか青あざが体中にできていた。幸い手術するほどの大怪我ではなかったので、高橋は三日ほど入院すると病院を出た。もちろん、完璧に治ったわけではないが、病院側に無理を言って退院したのだ。その理由はいたって単純である。一日中、硬いベットに横たわりながら時間を持て余すのに嫌気がさしたからだ。唯一の楽しみといえば、食事ぐらいなものである。ここでは睡眠という欲もわいてこない。また、直子には連絡してなく、家族は遠くに住んでいるので、見舞いに来る者もない。来る人といえ、あの時の警官ぐらいなものである。その警官も高橋から事情聴取を終えると、すぐに帰って行ってしまった。

この時、高橋は伊藤の辛さを身をもって知った。人の気持ちを分かっているつもりでも、実際に自分が同じような状況に陥ってみると本当には分からないのだ。人は苦勞しなければいけないとはよく言ったものだ。辛い経験を通していろいろな人の気持ちを理解できるのかもしれない。この場合、理解というよりは共感という言葉の方が自然かもしれない。そうやって人は大人になっていくのだ。老人を敬うというのはそういうことであろう。年をとれば、それだけ経験が増える。その中には辛い経験も大いに違いはない。故に、年をとるほど人に共感出きるようになっていく。そう考えると、それを取り越えてきた人々には敬意を表する価値がある。それと同時に、自分はまだまだ大人にはなりきれていない、それに引き換え、伊藤は成長したのかもしれないと感じた。

高橋は久しぶりに家に帰った。三日ほどしか経っていないが、無人島から母国へ帰った気分だった。無論、家の中は以前と変わりは

ないが、しばらく喚起をしていないせいか臭いがこもっていた。けれども、自分の家というのは落ち着くのだろう、高橋は帰るやいなやベットに横になった。病院のベットとは違い、布団はふかふかしていた。また、枕にしみついた自分の臭いも心地よい。まるで、戦から命拾いをして家に帰ってきたようだ。しかし、すっかり寝返りを打つと全身の傷が痛んだ。特に、肋骨は大事にしなければならぬ。もう一度入院といのはまっぴらごめんである。

天井を見つめたまま、高橋はなぜあんなことをしたのか振り返った。けれども、あの時は感情的になっていただけに、今振り返ってみても結論は出なかった。ただ腹がたつたからやったのだ。さらに言えば、自分の大切なものを侮辱されたような気持ちになったからやったのだ。そのため、後悔などしていなかった。むしろ、自分は正しい事をしたのだという誇りに満ちていたくらいだ。この傷も勲章みたいなものである。

それから天井がだんだんと薄暗くなり、いつの間にか高橋はすやすやと夢の世界へと入っていった。夢のなかで高橋は伊藤と話をしていた。伊藤はすでに退院し、体も以前と変わらぬ健康な姿に戻っていた。場所は新緑の緑が照り輝く山である。そこで、二人は山登りをしていた。

「今日はいいい天気だな。」

「本当だな。こうやってお前と散歩するのも久しぶりだな。」

「まあ、俺は入院してたからな。ははっ。」そう言っつて伊藤は白い歯をのぞかせた。

「しかし、天気もいいいけど景色もいいな。一体この山はなんて言うんだ？」

「それは分からないな。まあ、名前なんて後から人間が付けたものなんだ、大した意味なんてないよ。」

「それもそうだな。」

山道のところどころには大きな岩が転がっていた。その岩には、こけがびっしりと生えている。また、大きな木の根元には、根が地

表に浮き出ており、時折二人の足元をすくった。

「もう頂上かな？あの辺りがなんか開けてるようだけど。」と高橋は歩いている方向を指さした。

「んん、そうかもしれない。」

「走ろうか？」

「おお、競争するか？」

「いいね。競争なんて運動会ぶりだな。」

「それじゃ、お先に！」と伊藤は隙を見て駆け出した。

「おい。」と高橋も駆け出した。

勝ったのは高橋だった。

「お前フライングしたのに遅いな。」

「だからフライングしたんだよ。しかし、お前は速いな。」

「まあな、こう見えて運動神経はいいからな。」

「はいはい。」

それから、二人は調度よい高さの岩に腰掛けた。いきなり走ったせいか、二人の呼吸は荒かった。

「おい、見ろよ。海だぜ！」と伊藤はその方向を指さした。

「すごいな。山と海を両方堪能できるなんてめったにできないぞ。カメラ持ってくればよかったな。」

「目に焼き付ければ十分さ。」

海は、太陽の光に反射されきらきらと輝き、船が何艘か行き交っていた。また、空には鳶が円を描きながら、上昇気流にのって気持ち良さそうに泳いでいた。それに肌には清々しい風が当たり、熱った体を冷やしてくれた。耳を澄ませば、風の音が聞こえてくるようである。目を閉じれば、風の香りを感じ取ることができる。高橋は風に匂いがあることを初めて知った。樹木の匂い、土の匂い、岩の匂い、海からの潮の匂い、風はそれらを運んでくるのだ。

「風っていい匂いだな。」と高橋は伊藤に言ってみた。

「ああ、俺もそう思ってたところだよ。」

「今は新緑だから、これは新緑の匂いなのかな？」

「それ、おもしろいな。じゃあ、紅葉の季節は紅葉の匂いで、雪の降る季節は雪の匂いがするのかもな。」

「雪の匂いか、一度嗅いでみたいな。」

「俺は、山桜が咲く頃の匂いがいいな。」

「あつ、それもいいな。」

「その季節にまた来ようか？」

「そうしよう！」

二人は腰掛けていた岩から立ち上がると、頂上付近を歩き回った。そして、もう一度海を覗くと、先程の船が同じようなところに浮かんでいるのが見えた。遠くで見ていると、まるで玩具の船が湯船に浮かぶかと浮いているようである。水平線は微妙な弧を描き、両側に果てしなく広がっていた。当たり前の事であるが、教科書やテレビで見るのとはまた違うように思えた。

「あの水平線の向こうには何があるのかな？」と突然伊藤が言い出した。

「この海は太平洋だから、ハワイとかオーストラリアかな。あつ、アメリカかも・・・」

「お前は、夢がないな。」

「は？っ？じゃあ、お前は何かあると思ってるんだよ？」

「そんなの秘密に決まってるだろ。」と伊藤はニヤニヤしていた。

「なんだよ、もったいぶるのかよ。まあ、別にいいけどな。」

「あれ？気にならないのか？」

「別に・・・」

「おいおい、せっかくだから聞けよ。」伊藤は、高橋の方に腕をのせた。

「お前が秘密って言ったんだろ。」

「じゃあ、お前には特別に教えてやるよ。」そう言って、伊藤は高橋のわき腹を軽くつついた。

その時、高橋には激痛が走った。痛みの原因は肋骨のひびである。それから高橋は、自分が見ていたのは夢である事に気付き、現

実の世界へ戻った。しかし、それは実にリアルな夢であつた。もしかすると、あの景色は実際に存在するのでは？そう思わせるほど感覚が残っていた。けれども、現実には厳しいものである。夢の感覚もすぐに怪我の痛みへと変わっていた。

時計の針は、夜の八時を回っていた。今から眠れば、もう一度あの夢の続きを見られるかもしれない。そう思った高橋は目をつぶってみたが、痛みで寝る事はできなかった。

## 第二十三話

二十三、

明朝、高橋の目覚めは最悪だった。いつの間にか寝ていたが、昨夜はなかなか寝付けず、どこか眠り足りないような感じだった。しかし、のどはカラカラで、体にも鈍い痛みが残っていた。ベットから起き上がるのもしんどいが、このまま横になっているのもしんどい。また、入院時から寝すぎているせいか頭も重かった。そういうわけで高橋はとりあえず起きる事にした。

とにかく、のどの渴きを潤そうと冷蔵庫を開けてみたが、飲み物は入っていないかった。しかたなく、コップに水を注ぎ込むといっきに飲み干した。しかし、のどの渴きは治まらない。高橋は洗面台に両手を付き、鏡に映った自分の顔を見た。まぶたの上や頬は色が変わり、大きく脹らんでおり、喧嘩の激しさを物語っているようだった。このまま外に出たら周りから白い目で見られそうである。直子にもどう説明したらいいのか迷うところだ。伊藤関係のことは口にできないし、こちらから喧嘩を売ったとも言いがたい。まあ、考えるのも面倒なので、その場の雰囲気任せることにしよう。それより、腹が減ってしまった。昨日の夜は何も食べずに寝てしまったからだろう。とにかく、腹ごしらえをしなくては……。そう思った高橋は、人目を気にせず外に出だす事にした。

出だすといっても、まだ体が完全に治ったわけではないので、遠くに行く気はない。ただ、気分転換をし、空腹を満たせばいいのだ。なので、高橋は近くのお好み焼き屋に向かった。そのお好み焼き屋は、中年のおばさんが一人で切り盛りしている店である。店は目立たないところに在り、味もそれほどまいわけではないので、客は多くなかった。それでも、おばさんと親しい近所のおじさん等が遊びに来るのが常であった。高橋自身、この店に来るのは三回目

くらいである。何がいいということもないが、強いて言うならば、人が少ないというところだろうか。

その日も例外ではなく、客は高橋だけであつた。おばさんは鉄板の埋め込まれたテーブルに肘をつきながら、テレビを見ていた。そして、高橋が入ってくると、不意を撃たれたように姿勢を正した。

「いらつしやい。」

「どうも。日替わりでお願いします。」

「はいはい。」とおばさんはコップに水を注いで来てくれた。それから高橋の顔を見て驚いた。

「余計なことですが、ひどい怪我ですね。どうかなすつたんですか？」元来、おばさんというのはこういつた話が好きである。彼女たちには相手がどういった状況であろうと話しかける図太いところがある。

「この顔の傷ですか？」

「はいはい。」おばさんは興味深そうに顔を見ている。

「ちよつと酔つ払いにからまれましたね・・・」

「あらまゝ、お気の毒にね。夜はこくら辺もぶつそうだから、気を付けてね。」

「はい。ありがとうございます。」そうして高橋は水を飲んだ。高橋が水を飲んだのを見ると、おばさんは準備をしようとその場を去つた。

店の中は、綺麗か汚いかと聞かれれば、汚い方だつた。汚いというよりは生活観があふれているように感じた。店内には必要ないと思われるカレンダーがかけてあつたり、店の角には普通の電話が置いてあつたりした。席はざつと見て十人座ればいっぱいになるくらいだろう。客が来ない店としては十分過ぎるほどだ。

高橋が店内を見回していると、おばさんが料理を運んできた。さすがに店を切り盛りしているだけあつてやることは早い。しかし、味はいまいちだつた。それに加えて、食べ物を読み込むたびに傷が痛んだ。それでも腹を満たさなければやっていけない。そう思い、



高橋はもくもくと食べた。

そうやって高橋が日替り定食と戦っている間、おばさんはテレビを見ながら笑っていた。そして、笑うたびに黄ばんだ歯がちらちらと顔を出した。髪も茶色に染めていたが、ところどころ白髪が交じり、痛んだ髪の印象をさらに悪いものにしていた。言葉は悪いが、まるで野良猫のようである。しかし、この女にも美しい時代はあったに違いない。おしゃれをするしないに関わらず、若さからくるみずみずしい時代があったはずだ。それが、このような姿になってしまうのは信じがたいことだ。いつしか自分たちの世代の女もこのようになってしまふのかと思うと切なくなる。確かに、人は外見ではないが、おおよそ内面は外見にしみ出てくるものである。いくら年をとったおばあさんでも、内面が美しい人は外見も美しく見えてくる。もちろん、その姿にみずみずしさは見受けられない。けれども、もつと遠く、深く、濃い美しさがあるのだ。若い女の美しさをガラスに例えるなら、老女のそれは陶芸品である。そうは言うものの、この女には陶芸品のような美しさはない。やはり、教養も必要なのかもしれない。と高橋は勝手におばさんを評価した。おばさんにとつてはいい迷惑である。

高橋は、食事を終わると、いつものように店を早く出た。男一人で長居する必要はないのだ。それから、高橋は久しぶりに古本屋に行く事にした。最近はいろいろな事があって古本屋に行く事もなかった。それどころか、入院していたため大学にも行っていない。その時、高橋は重要な事に気付いた。今日は授業があったのだ。しばらく大学に行っていなかったで、すっかり忘れていた。けれども、今日は行く気がしない。そんな時に行くのは苦痛でしかない。今日は退院祝いと言う事にして休みにしよう。こういった甘えが後で命取りになることは分かっていたが、高橋は予定通り古本屋へと向かった。

## 第二十四話

二十四、

怪我の事は、伊藤には言っていなかった。言ったところで状況が変わるわけでもないし、余計な心配をかけるだけだからだ。しかし、直子には言わねばなるまい。と言うより、会った時に怪我を見られてしまう。かといって、いつまでも避けているわけにはいかない。そのため高橋は直子と会う約束を断れなかった。その約束というのが今日である。

二人は講義が終わった後、よく行くレストランで食事をする事になっていた。けれども、高橋の気分はさえなかった。まず、怪我の説明をするのが面倒だ。次に、伊藤の話を言わないようにしているのが厄介だ。それでも、前向きに考えれば、いい気分転換になるかもしれない。最近は人と話す事が少なかったもので、どうしても内向的になりがちだった。今夜はそれを解消するいい機会かもしれない。高橋はそう自分に言い聞かせた。

高橋がレストランの前に着いたのは、予定時刻の十分前だった。しかし、それより先に直子は来ていたようだ。レストランに向かう高橋を見つけると、店の前でいつものように手を振っていた。

「久しぶり、今日は早いね。」

「久しぶり……ってその顔どうしたの？」

「ああ、これね。まあ外でもあれだから中で話そう。」

「気になるわね。」と直子は心配そうに高橋を見つめた。

二人は店内に入ると中を見回し、一番端のテーブルに腰掛けた。床はワックスをかけたばかりなのか、いつもよりピカピカと輝いて見えた。覗き込めば顔が映りそうである。また、壁にはヨーロツパ風の風景画が掛けられていた。絵のタッチはゴッホに似ているが、実際は安い絵なのだろう。しかし、雰囲気味わうには十分である。

それから、ウェイターがお冷を注ぎに来た。お冷を注ぐグラスも花瓶の様な形をしている。大方、お洒落ではあるが注ぎづらそうである。けれども、その姿は可愛らしくも滑稽で、実におもしろい。高橋はこの店の可愛い雰囲気が好きだった。

「それで、その怪我はどうしたの？」

「ちよつと街中で喧嘩に巻き込まれて。」

「誰の喧嘩に巻き込まれたの？」直子はいたって真面目に聞いてきた。

「まあ、話せば長くなるから手短に言えば、酔っ払いの喧嘩に巻き込まれただけだよ。」

「ええ、信じられない。それで？」

「それでつて、それだけだよ。」高橋は水を一口飲んだ。

「そんなの聞いたことないわよ。酔っ払いの喧嘩に巻き込まれるなんて。」直子は不満そうである。まあ、それも仕方のないことである。事実、高橋は嘘を付いている訳であるし、説明が簡単過ぎた。

「そんなこと言われても、実際そうなんだから仕方ないだろ。」

「そりやそうかもしれないけど・・・それにしても、なんで教えてくれなかったの？」

「それは・・・お前が心配すると思ったから。」

「当たり前じゃない。」と直子は少し大きな声を出した。

「ごめんよ。」

「まあいいわ。とりあえず今は元気そうだし。」

「怒った？」

「怒ってはいないけど、私は喧嘩する人と煙草を吸う人は大嫌い！」

「ごめん、これからは気をつけるよ。でもあの時は・・・いいや、この話はもうよそう。それより、料理を注文しようか。」

高橋は、直子が喧嘩と煙草が嫌いなのを初めて耳にした。しかも、このようにはきはきと話をする直子を目にしたのも初めてだった。人間というのは不思議な生き物である。直子と付き合つて、もうしばらく経つのに、新しい発見が絶えない。無論、喧嘩や煙草が好き

な女もそうはいないが、自分のことを思つて強く言つてきてくれるのはうれしいものである。それに引き換え、自分は本当に直子のことを大切に思つているのか疑問だった。以前にも考えた事だが、なぜ付き合つているのか分からない。確かに一緒にいれば楽しいが、それは他の人にも当てはまることだ。付き合う事の意味はなんなのだろうか？もし、意味があつたとすれば、それは一人一人違つたものなのだろうか？正直、高橋は直子が自分にとってなんなのかさえ分からなくなつてきていた。できるものなら、直子がどういふことを考えているのか聞いてみたかつた。けれども、そんな事は聞けない。なぜ聞けないのかも分からないが、それは触れてはいけなものである。のだといふことは直感で分かつた。

それから二人は料理をオーダーし、話の内容は伊藤へと移つた。

「そつえば、最近伊藤君にあつた？」

「いや、しばらくお見舞いに行つてないよ。」

「そう。」直子は下を向いている。

「どうして？」高橋は直子の顔を覗きこんだ。

「私、一昨日、ひとりで行つてきたんだけど・・・」

「どうだつた？」高橋もしばらく会つていなかったたので、あれから伊藤がどうなつたのか氣になつた。

「なんか、前の伊藤君とは別人みたいだつた。」

「それは外面的に？それとも内面的に？」

直子は、少し頭を傾けながら次のように答えた。

「目立つのは外面的にかな。なんかおじいさんのように細くなつちやつてて・・・、肌も黒ずんで見えたわ。雰囲気は、一見いままでのようなんだけど、なにか心の奥に塞ぎ込んでいるものがあるみたいだつた。」

「俺が会つた時もそんな感じだつたよ。」

「だいたい伊藤君はなんで入院しているのかな？」

「・・・」高橋は返答に迷つた。

「しかも、こんなに長く入院しているのに、まだ退院できないんだ

よ。なんかおかしいと思わない？」直子の口調はだんだんと強くな  
っていった。

「病院にもなにか事情があるんだろ。そうじゃなければ、入院はさ  
せないよ。」

「そりやそうだけど、全然よくなってる感じがしないじゃない。」  
「・・・」

実際、直子の言う事は正しかった。あれだけ大きな病院でありな  
がら、伊藤の体は良くならないどころか、むしろひどくなっている  
ようにも思われる。

「あれじゃ、伊藤君が可哀想だよ。そう思わない？」

「そりやあ思うよ。でも・・・」

「でも？」

「どうにもならないじゃないか。」

「・・・」直子は口を結んで下を向いている。

それから、二人の元には料理が運ばれてきた。いい香りがするが  
美味しそうだとは感じない。きっと直子もそう思っているだろう。

しかし二人は無理やり料理を口に運んだ。その間、噛む事以外に口  
を開く事はなかった。一方、周りのテーブルからは楽しそうな笑い  
声が聞こえてきた。

こんなはずでは・・・と高橋は思った。そもそも、今夜は気分転  
換をするために来たのだ。それがこんなことになるうとは。高橋は  
何かが崩れていくのを感じた。それは、伊藤に関する事でもなけれ  
ば、直子に関する事でもない。高橋自信のなにか大切なものが失わ  
れようとしていたのだ。けれども、それが何かは分からない。

## 第二十五話

二十五、

もう、大学では伊藤の噂をする人はいなくなっていた。それよりも、テストが近いせいか、みんな講義に集中しているようだった。高橋もテストが近かったが、いまいち集中できなかった。理由をつければ切がないが、一番の原因は自分である。今は集中しなければと思いつつ、講義に集中できなかった。

それに加えて、昨日の直子との食事で高橋の気分は完全になえていた。それに、伊藤のことも気にかかった。どちらにしても、自分が解決の鍵を握っていることは間違いない。しかし、直子の方は、一時的な感情の変化に過ぎないだろう。直子も自分の身の回りの変化に着いていけないだけなのだ。今思い返せば、自分もそうであつたはずだ。伊藤が事故をした時、入院した時、薬物中毒であることを知った時、そのような劇的な変化に耐えながら、前に進んでいくのは大変な事であつた。しかし、現在ではある程度慣れ、大概の事は冷静に処理できるようになった。これも自分が成長した証なのかもしれない。直子もいずれそうなるはずである。そう思うと気持ちが少し楽になった。

午前中の講義が終わると、高橋は大学の食堂でひとり昼飯を食べた。周りでは、学生がわいわい騒ぎながらご飯を食べている。しかし、一人で食べていても寂しいともうらやましいとも思わない。むしろ、他の人に話を合わせたり、相槌を打ったりして気を使うのは面倒くさい。面倒くさいどころか馬鹿げている。そのような関係は友達ではなくビジネスだ。そういった考えから、高橋は友達からの誘いを断るのが常であつた。

食事を終わると、高橋は午後の講義室へと向かった。講義室には弁当を持参している人々が数人いた。高橋は、大学生でありながら

弁当を作つて来る人に感心しつつ、いつもの席を陣取つた。それから机に顔を伏せて、浅い眠りに着いた。

午後の講義も暇であつた。やる事はたくさんあるのだが、いつも暇になつてしまう。今日に限つては読書に精も出ない。講義で覚えている事といつたら、先生の頭が禿げていたことぐらいなものである。

今はこのような学生でもなんとか単位が取れてしまう。自分の事ながら、このような大学の現状には失望してしまう。かといって、これからどうしようという意欲はない。とりあえず、卒業して就職できればいいのだ。もはや、これは大学の風景になつてしまつたのかもしれない。勉強をするために行くのではなく、なんとなく行くのだ。そして、卒業した後はなんとなく生きて、なんとなく死んでいく。そう考えると自分はなんで生きているのかさえ分からなくなる。

午後の講義は、このような感じで終わりをむかえた。それから、高橋は伊藤の病院へと向かつた。それは行こうと予定していたわけではなく、足が自然とその方向へと向いたのだつた。

病院の玄関を抜けると、その前には大きなロビーがある。そしてそのロビーには緑色のソファアが所々に設置されており、そのソファアには患者が座つて世間話などをしていた。このような閉鎖された空間では、こういった時間が至福のひと時に違いない。なかにはソファアに横になつてゐる人もゐる。こうなつてくると、まるで自分の家のようなのだ。

そのなかに、高橋は見覚えのある男を見つけた。一瞬、自分の目を疑つたが、それは間違いなく伊藤であつた。伊藤は、週刊誌に目をやりながら片手で首の辺りをかいてゐた。高橋は、その様子を伺いながら恐る恐る近づいた。

「久しぶり」。高橋が顔を覗いてみると、それは、やはり伊藤であつた。

「おう。驚いたな。」

「なんで、こんなところにいるんだ？」

「おまえこそ、なんでここに？それにその傷はなんだ？」

「これか、これは大した事ないから気にしないでいいよ。」

「気にしないって言ったって、気にするよ。」

「いいの、いいの。それよりお前は何してんだ。寝てなくていいのか？」

「最近、リハビリを始めたのさ。リハビリといっても院内を一人で歩いているだけだね。いつまでもベットに寝ていられないだろ。」

「そりゃあいいことをはじめたな。先生にやれと言われたのか？」

「いや、リハビリといっても勝手にやってるだけだよ。」

「そうか、そうか。」

伊藤の様相はあいかわらず年老いて見えだが、口調は元気そうだった。

「それにしても、お前は何しに来たんだ？」

「何しにつて、お前の様子を見に来たに決まってるだろ。」

「ははっ、そうだよな。ありがとう。」

「でも、元気そうで良かったよ。」

「まあ、そこそこかな。」

高橋は、直子がお見舞いに来た時のことを聞きたかったが、なんとなく止めておいた。

「ここに来てくれるのはうれしいけど、忙しくないのか？もう少しでテストだろ。」

「俺の事は気にしないでいいよ。」

「俺もその言葉をそのまま返すよ。」と言って伊藤は微笑した。そして、次のように続けた。

「お前は、もう俺と関わらない方がいい。大方、その怪我もそのせいだろ？お前は俺に優しすぎるよ。それには感謝してもしきれないほど感謝してる。けれど、お前にはお前の生活があるんだ。それに、直子だっているじゃないか。俺はもう大丈夫さ。もう、決心はついてる。」



その瞬間、伊藤がやけに大人びて見えた。

「そんな寂しい事言うなよ。」

「ははっ、でも本当にそうなんだ。お前はもつと自分と直子を大切にしろ。」伊藤は高橋の肩をやさしく叩いた。

「それなんだ。確かに俺には直子がいるけど、最近、なんで一緒にいるのかよく分からないんだ。」

「直子の事が好きじゃないのか？」

「いや、好きだと思う。だけど、付き合う意味が分からないんだ。」

「難しいこと言うな。」

「お前は どう思う？」

「俺は、付き合うのが自然だからだと思うよ。お互い好きだから一緒にいたいと思うだろ。それだけのことなんじゃないかな。お前は少し考え過ぎだよ。」と言って伊藤は笑った。

「そうかもな。」高橋は苦笑いをした。

「まあ、仲良くやってくれよ。お前には俺みたいな風になって欲しくないからな。」

「苦しい時はお互い様さ。ほっつておけるかよ。」

「ありがとう。でも、俺にはもう関わらない方がいいよ。悪い事はあつても、いいことはないと思う。お前には先があるんだ。」

「・・・」

伊藤の真剣な眼差しを見て、高橋は言葉が見つからなかった。あの事故を通して、伊藤はずいぶんと成長したようである。以前は自分より子供だと思っていたが、今の伊藤には大人の輝きと落ち着きがあった。本来、自分は伊藤を励ます立場なのに、逆に励まされている。高橋はこのような状況が可笑しくもあり、また寂しくもあった。

## 第二十六話

二十六、

高橋は、それから三日ほど伊藤とも直子とも話をする事はなかった。そのためか、一人孤独感を味わっていた。その上、その日は休日ということもあり、孤独感は一層際立った。そのため、高橋はベツトに座りながらテレビを見ていた。こういった時に重宝するのはテレビである。小さな部屋に一人でいても、部屋全体を明るく雰囲気に変えてくれる。しかも、人と違ってコミュニケーションをとらなくてすむので、非常に楽である。電源を入れれば、後は勝手にブラウン管の向こうで話を進めてくれる。そうやって高橋が無駄な時間をつぶしていると、いきなり電話がかかってきた。電話の相手は直子である。

「もしもし。」高橋はテレビをつけたまま電話に出た。

「もしもし。大変なのよ！」直子は異常に興奮していた。

「おいおい、いきなりどうしたんだよ。」

「伊藤君が亡くなったのよ！」

「はっ？今、伊藤がなくなっただって言ったのか？」

「そうよ！」

高橋の頭は真白になり、いきなりの報告に何が起きているのか把握できなかった。

「詳しい話を聞かせてくれ。」

「電話はあれだから、今から会って話しましょう。」

「おう、分かった。それで、今どこにいるんだ？」

「今、病院。すぐに来てもらえる？」

「分かった。すぐ向かうよ！」

高橋は電話を切ると、服も着替えずにそのまま家を飛び出した。自転車をこぐスピードはいつになく速い。けれども、病院までの道

のりはいつになく遠く感じた。なぜ、伊藤が？高橋は驚きと不安を隠せなかった。

病院の周りには、なにやら人だかりができていた。その中には警察の姿もある。高橋は人ごみの中をすり抜けると、ようやく病院の玄関までたどり着いた。しかし、玄関には黄色いテープが張り巡らされ、中に入ることはできなかった。その上、病院の中にも警察がいた。なにか事件があつたようだ。高橋は、なにか胸騒ぎを感じた。それから、高橋はさらに人ごみを掻き分けて人だかりの中心に向かった。そこは駐車場であつたが、こちらも黄色のテープが張り巡らされ、警察が座り込みながらなにか作業をしていた。良くは見えないが、なにやら血痕のようなものがアスファルトの上に付着している。周りでは人々がなにか話していたが、内容はよく聞き取れない。そんな中、高橋は、自分の名前を呼ぶ声に気付いた。

「信くくん。」

声の主は直子のものであるが、周囲に姿は見受けられない。

「信くくん。ここよ、ここ！」と直子は右手を上げながら、高橋の方へと近づいてきた。

「この人だかりはなんなんだ？」

「さっき電話したのもこの騒ぎのためよ。」

「はあ？それより伊藤の話聞かせてくれよ。」

「今から話すわ。それより、少し静かなところへ行きましょう。」

高橋は直子に連れられ、人ごみのなかから抜け出した。それから、二人は病院の敷地内にあるベンチに腰を下ろした。

「それじゃ、伊藤の話聞かせてくれ。」

「まずはあの騒ぎの話からよ。」

「あんなのはどうでもいいよ。それより伊藤の話聞かせろよ！」  
「いいから聞いて！」直子はいつになく真剣な表情であつた。

高橋は、直子の気迫に押され、話を聞くことにした。

「あれは事件なのよ。病院の屋上からこの患者が飛び降りたみたい。警察は事故の可能性も視野に入れて捜査しているみたいだけ

ど、自殺の可能性が高いみたいなの。もちろん飛び降りた人は即死よ。私もはつきりとしたことは言えないけど、その自殺した人がどうやら伊藤君らしいのよ。」直子は顔に両手を当てて泣き始めた。

「それは確かか？」

「はつきりしたことはまだ分からないわ。」

「どこでそんな情報を手に入れたんだ。」

「さっき、テレビ局が現場で報道していたのよ。あとは周りの人の話とかをまとめてみたら、伊藤君にぴったり当てはまるのよ。」

「俺は伊藤と会うまで信じないぞ。」そう言って高橋は眉間にしわを寄せた。直子は手で顔を覆ったまま縮こまっている。

「とにかく、もう少し情報がないことにはどうしようもないよ。」

高橋は直子の背中を優しくなでた。

「そうよね。まだ、伊藤君だと決まったわけじゃないんだもの。」

「もちろんそうさ！」それから次のように続けた。

「俺は、ここに残って情報を集めるよ。直子は、家に帰ってテレビを見ていてくれ。」

「うん。」

「それで、なにかあったらお互い連絡することにしよう。」

「うん。」直子は涙に濡れた顔を上げ、高橋の顔を見た。

「それじゃ、お互い頑張ろう。」

そう言うやいなや、高橋はベンチから立ち上がって、病院の建物の方へと走っていった。一方、直子は、まだベンチに座ったまま高橋の後姿を見つめていた。

## 第二十七話

二十七、

時間も経ち、人ごみは大部分なくなっているようだった。けれども、黄色いテープのなかでは、警官がさっきと同一ような事を続けている。高橋はその様子をじっと見つめていた。すると、一人の警官が黄色いテープを潜って外に出てきた。

「皆さん、申し訳ありませんが仕事の邪魔になるので、もう帰ってください。」

それを聞いて、すぐに帰る人もいれば、聞こえないふりをしてその場にたたずむ人もいた。無論、高橋は後者の方である。それどころか、高橋は、その警官のもとに歩み寄って行った。

「すみません。この騒ぎは、一体何なんですか？」

「今はお答えできません。」

「お願いです。教えてください。」

「これは決まりでして・・・」

「お願いします。この病院に入院している友達の安否が気になるんです。」

「・・・」警官は、決まり悪そうに高橋を見ていた。

「ちょっと待っていてください。」そう言つと、その警官は他の警官のもとへと戻っていった。

辺りは帰っていく人々の話し声と足音で一時騒然となった。その波が過ぎ去ると、その場には警官と高橋だけが残った。あれだけ騒がしかったのがまるで嘘のようである。しかし、静かになったのはいいが、いきなりこうなると、今度は寂しくなってくる。どこか、ここは自分がいてはならない場所のようにも思えてくる。そもそも自分は何をしているのか？今は何を待っているのか？そう考えて、高橋は警官を待っている事に気付いた。黄色いテープの向こうでは、

警官たちが時折高橋の方を見ながら立ち話をしている。彼らの表情から話の内容は楽しいものでないことは確かだった。

「お待たせしました。」そう言っ、さっきの警官が高橋のところへ戻ってきた。

「はい。」

「お名前を伺ってもよろしいですか？」

「はい、高橋信幸です。」

「ありがとうございます。」そう言いながら、警官は何かメモを取っているようだった。それから、次のように続けた。

「それではお聞きますが、伊藤隆さんのことをご存知ですか？」

「はい。大学の友達です。やっぱりあいつに何かあったんですか？」  
「すみませんが、それにはまだお答えできません。もうしばらく待つてください。」そう言っ、今度は病院の中へ入っ、行っ、しまっ、った。

それから十分ほど過ぎたろうか、警官は、また高橋のもとに戻っ、ってきた。

「お待たせしました。本当は、一般の方に情報を漏らすのはいけな  
いのですが、今回は上からの許可が出たので、特別にお教えます。

「

「あっ、はい。ありがとうございます。」

「とりあえず、中へどうぞ。」

そうして、二人は病院の中へ入っ、いった。また、会話は歩きな  
がら続けられた。

「やっぱり、伊藤に何かあったんですか？」

「ええ、まあ・・・」

「それに、あの騒ぎは何なんですか？」

「実は、伊藤君は、今日亡くなられたんです。」

「・・・」高橋は、一瞬自分の呼吸が止まるのを感じた。

「とてもショックな事だと思いますが・・・」

「死因はなんですか？」高橋は、自分でも信じられないくらい冷静

だった。

「非常に申しにくいのですが、自殺だと思われます。」

「じゃあ、あの騒ぎはやっぱり伊藤だったんですか？」

「はい。屋上から飛び降りたと思われます。」

「そうでしたか。」

高橋は、警官の背中を追いながら、会議室のような場所につれてこられた。中に入ると、そこには伊藤の両親が座っており、医者と警官となにか話をしていた。けれども、母親の方は泣き崩れていて話に入れていなかった。高橋が挨拶しても、挨拶を返してくれたのは父親だけだった。

高橋は、このような場合、どうしたらよいのかという知識を持ち合わせていない。そのため、誰かが声をかけてくれるまでそこに立っているしかなかった。このような状況では、慰めの言葉もかけられない。幸い、伊藤の両親と話をしていた警官が高橋を見て、声をかけてきた。

「君が、高橋君かい？」

「はい、そうです。」

「実は、君に渡すものがあるんだ。こっちに来てくれないか。」

「はい。」そう言つて、高橋は、重い空気が漂う方へと足を運んだ。

「これだよ。」一言そう言つと、その警官は、高橋に手紙を差し出した。

「これは何ですか？」

「それは伊藤君からの手紙だよ。遺言といった方がいいかもしれないがね。」

「伊藤が・・・」

「そう。伊藤君は、家族と君にそれぞれ手紙を残していったんだ。」

「ありがとうございます。」高橋は深く頭を下げた。

「私に言われても困るよ。その言葉は伊藤君に言つてやつてくれ。」

「はい。」

その手紙の封筒には、直筆で伊藤の名前が書いてあった。ボール

ペンで書かれたその筆跡からは、どこか懐かしさが感じられた。しかし、伊藤が死んだという実感は全く湧いてこない。そのためか、悲しいとか辛いといった感情もなかった。それは、高橋が現実を受け止めたくなかったのではなく、単に、現実に取り残されているだけだったのである。

高橋は伊藤の両親に挨拶をし、病院を後にした。黄色いテープの中ではまだ警官たちが作業をしている。高橋を中へ案内してくれた人もいつの間にかそこに戻っていた。病院の屋上を見上げると、そこは切りたった崖のようである。伊藤はあそこから飛び降りたのか。そう思っても実感は湧かない。実感が湧かなければ、これといって感情も湧かない。高橋に感情が戻るには、少し時間がかかりそうである。



## 第二十八話

二十八、

高橋は、家に帰るとすぐに直子に電話を掛けた。

「もしもし、直子？あの騒ぎの原因が分かったよ。」

「なんだったの？」

「やっぱり伊藤だったよ。」

「伊藤君が・・・」

「屋上から飛び降りたみたいなんだ。」

「それじゃあ・・・」

「ああ、亡くなったよ。」

直子は、電話の向こうで泣いているようだった。受話器からは直子の声が途切れ途切れに聞こえてくる。その様子から、驚きというよりは、単純に悲しんでいるように感じられた。しかし、冷静に考えてみれば、そうなるのが普通である。だから、直子が悲しんでいるのは一般的にはおかしくない。むしろ、おかしいのは高橋の方であろう。社会一般の人はそう思うに違いない。それは直子にとっても例外ではなく、高橋の異常な冷静さに違和感を覚えていた。

「信君は、伊藤君が亡くなって悲しくないの？」

「よく分からない。」

「よく分からないって何よ。伊藤君とは親友だったでしょ。それで、何とも思わないの？」

「だから、よく分からない。もちろん、事情を知るまでは心配したさ。けれど、結末を知った時には、自分でも信じられないくらい冷静になったんだ。」

「なんで冷静でいられるの？」

「自分でも分からない。でも、なにか仕えていた物が取れて、すっきりしたような気分にも近いかもしれない。」

「それじゃ、伊藤君が厄介だったみたいじゃない。」直子は興奮しているようだ。

「そうじゃないんだ。」

「じゃあ、何よ。」

「だから、分からない。とにかく言えるのは、伊藤は特別な存在だったってことさ。」

「それなのに、泣いてもいないじゃない。」

「なんで泣いてないって分かるんだ。」

「そんな話してれば誰でも分かるわ。」

「ああ、確かに俺は泣いてない。伊藤の結末を知った時も泣かなかったさ。けれど、そのどこがいけないんだ。泣かないからって伊藤に失礼はないだろ？」高橋は言ってしまった後に後悔した。感情に任せて、ついつい余計なことまで泥を吐いてしまった。

「ひどいわ！信君がそういう人だとは思わなかった。」

「・・・」

それから、高橋は電話を切られてしまった。電話の向こうでは、ブーブーブーという音が寂しく鳴っていた。高橋は、仕方なく携帯をテーブルの上に置くと、ベットに横になった。よく見ると、白い天井には黒い蜘蛛が一匹のろのろと動いていた。白と黒のコントラストが非常に美しい。もしかすると、あの蜘蛛は、伊藤の生まれ変わりなのかもしれない。そう思うと高橋は微笑した。

高橋は、直子との会話を振り返ってみた。しかし、感情に任せて言ってしまった事以外に後悔はなかった。自分は、今の状況を正確に伝えただけである。伊藤に対する感情や今の自分の気持ちに嘘をつけば、こんな事にはならなかっただろう。しかし、嘘をついたところで何になる？それこそ直子にも自分にも失礼であろう。人は、本当の感情があるがままに伝えるのが常である。それを怠れば、関係は悪くなるはずだ。本当の事を言って、それに反感を持たれたら、もはやそれまでだろう。その人とは、元来合わないのだ。そもそも万人が万人、馬が合うわけではない。自分と直子も生まれつきそう

なのかもしれない。後ろを振り返れば、今までにそういったことが全くなかったわけではない。むしろ、多々あったと言える。今回は、それが顕著に出ただけなのだ。

そんな事を考えていると、男女の仲というのが、よくよく分からなくなってくる。自分は、直子に何を求めていたのか？はたまた、直子は自分に何を求めていたのか？また、相手に気に食わないところを見つければ、別れてしまうのが男女の仲なのだろうか。そもそも、そんな事を言っていたら、男と女が結びつくのは不可能である。そうになると、関係がうまくいくには、お互いの我慢が必要なのかもしれない。けれども、我慢をしてまで異性と付き合う価値があるのだろうか。そんなことをしては、自分を見失ってしまいそうである。それに一人でいた方が何倍も気楽でいい。

ふと気が付くと、天井の蜘蛛はどこかに消えていた。そして、高橋は、ズボンのポケットに違和感を感じた。なにかと思つて手を突っ込んでみる。突っ込んでみて、それは伊藤の手紙だと気が付いた。ポケットに入れていたせいか、封筒はぐしゃぐしゃになっていた。高橋はベットに寝転んだまま、その手紙をじっと見詰めていた。しかし、見つめるだけで封を切ろうとはしない。それがなぜだかは分からないが、今は開けてはならないような気がしてならない。この封を開けた時、それは伊藤との別れを意味する。そして、文章を読んだ時、それは伊藤の死を受け入れることにつながる。

高橋は、手紙を枕元に置いて、そっと目を閉じた。このまま眠ってしまいたい。できるなら、死ぬまで目が覚めないで欲しい。もし、そうなれば、余計なことや難しい事を考えずにすむ。しかし、考えるたびにいろいろな事が頭から湧き出てくる。心は静かなのに、高橋の脳は興奮していたのだ。そのような状況において、眠れるはずがない。自分は、元来考えすぎてしまう性格なのだ・・・、自分は考えすぎてしまう・・・、自分は・・・

## 第二十九話

二十九、

翌日の朝、高橋は強い尿意を感じ、目が覚めた。決して、いい寝起きとは言いがたいが、尿を出すと変な満足感を覚えた。そして、冷蔵庫から一〇〇%のフルーツジュースを出して、パックのまま口元に運んだ。

昨夜は、いろいろ考えていてなかなか眠れなかったが、結局は寝てしまったようだ。所詮、人間の思考とは、その程度のもので、最後には本能的な欲に負けてしまうのだ。それよりも、昨夜は何も食べていなかったで、朝とは言え、腹が減っていた。あいにく、家にはこれといって食べる物はなく、ジュースだけで腹ごしらえするのは至難の業である。このまま、昼まで寝てしまってもいいが、昨夜のようにはなりたくない。それに、今日に限って寝むたくなかった。

そのため、高橋は、しぶしぶ家を出た。そして、家から一番近いコンビニに向かった。そこでおにぎりを買うつと、歩きながら食べ始めた。海苔の香りとパリパリとした触感が、朝のひんやりとした空気とマッチし、高橋の体を目覚めさせてくれた。おにぎりは、全部で三個買ったが、家に帰るまでには全て平らげてしまった。そうして、家に着く頃には、高橋の体には力がみなぎっていた。

ちなみに、大学の講義は午後からだった。そのため、家に帰っても特にする事はなく、暇であった。無論、暇を持て余すのは慣れている。けれども、伊藤や直子のことを一人で考えているのは、それなりにしんどかった。ならば、考えなければいいではないかと言われるかもしれない。しかし、高橋も人間に産まれてきた以上、考えずにはられない。

高橋は、家に帰るとコタツに入った。それから、昨日の蜘蛛はい

ないかと部屋の中を見回してみた。蜘蛛はいなかったが、部屋の角には小さなゴミがたまっていた。いつからか分からないが、しばらく掃除をしていないのは確かである。そろそろしなくてはと思うつつ、コタツに入ってしまった今、その考えはあまりに無力だった。

高橋は、コタツに入っただけ、しばらく時間が経つのを待っていた。そんな時、携帯に電話がかかってきた。

「もしもし、信幸。」

「ああ、母さんか。」電話の相手は、高橋の母親だった。

「さつき、テレビ見てびっくりしたんだけど、お前の通ってる大学の学生が自殺したんだって。」

「もう知ってるよ。伊藤のことだろ。」

「そうそう、伊藤って言うてた。お前知ってるのかい？」

「知ってるも何も、友達だよ。」

「驚いたね。あんた友達だったの？」

母親は、この事件に関して、可哀想というよりは面白がっているようにも取れた。そのため、高橋は、母親の質問に答えているのが苦痛でたまらなかった。伊藤の死は見せ物ではないのだ。そもそもテレビでやっていることさえ不愉快でたまらない。

「なんで、自殺なんかしたんだい？」

「そんなの知らないよ。」

「彼とそんなに仲良くなかったのかい？」

「そんなの母さんに関係ないだろ。」

「なんだいその口の利きようは。お前の身近で起きた事だから心配してるのに。」

「心配？楽しんでるようにしか見えないけどね。」

「なんで、お母さんが楽しまなくちゃならないの！」

「伊藤は俺の親友だったんだ。それがどの位のものだったか、母さんには分からないよ。」

「心配してるのに、分からない子ね。」

「分からないのはどっちだよ！とにかく、この件についてはあんま

り話したくない。」

「あつ、そう。なら聞かないわ。」

「そうしてくれよ。」

親子の会話は、ぎくしゃくした形で幕を下ろした。高橋は、昨日の直子との電話もこんな感じだったなと感じた。もしかすると、直子も自分が母親に感じたようなもどかしさを感じたのかもしれない。もし、そうだとすれば、直子に申し訳ないことをした。

人は相手にいやな事をして、それを理解できない。本当に理解できるようになるには、同じような事を自分も経験しなくてはならない。しかし、それに気付いた頃にはもう遅いことが多い。直子にしても、もう遅いかもれない。そう思うと、高橋は、急に心細さと後悔の念を感じた。けれども、こんな時邪魔になるのは、変なプライドや意地等といったものである。高橋は、今さら直子に頭を下げるといったことをしようとは思わなかった。人の世というのは住みにくいところである。いつそ伊藤のように、あの世に行った方が楽なのかもしれない。

### 第三十話

三十、

伊藤が自殺してから二日がたった。高橋のもとには、直子からの連絡もなく、伊藤の手紙もそのままであった。変わったことといえば、部屋を掃除したことぐらいなものだ。それ以外、高橋の感情にも大きな変化はなかった。ただ、今日は大学をさぼってしまった。それは、決して行きたくなかったというわけではなく、他にすべき事があつたからだ。他にすべき事とは、山に登ることである。それが、高橋の原点であり、原点に戻る事により、これからを見つけようとしていたのだ。そこで、話はこの小説のはじめに戻ることになる・・・

落ち葉を踏みしめながら山道を登っていく。今日は、やけに落ち葉を踏みしめるミシミシという音が、耳に心地よく感じられる。高橋は、何か考え事があると、名も知れぬこの山へと足を運んでいた。紅葉も終わり、葉の落ちた樹木は、どこか寂しげな雰囲気を出しつつ、高橋を歓迎しているかのようにも見える。そして、高橋は、それに誘われるかのように足を運んでいた。半時も歩くと視界が開け、目前に錆のこびり付いた、いかにも古そうな展望台が見えた。高橋は、その展望台へと上り、背筋を伸ばすと、ため息をひとつついた。吐息は白くなつたかと思うと、どこかへと消えていった。しばらく手すりにもたれ掛かり、沈黙だけが続く。そして、冬を告げるような冷たい風が、高橋の胃をさすのだった。

それから、高橋は、しばらく冷たい風に身を任せていた。一人で山の中にいると、感覚が研ぎ澄まされていくのを感じる。それと同時に、まだ治りかけの肋骨が痛むのを感じた。また、山の麓には高橋の住む街が臨めた。人などは小さすぎて肉眼では確認できない。

電車や車でさえ玩具のように見えてしまう。

あれが自分の住んでいる街で、今頃、直子たちは、どこかで何かしているのだろう。こうやって、街を臨んでいると、ものの見方は自然と客観的になってくる。あの街を現実社会だと想定すれば、自分のいるこの場所は非現実社会であると言える。自分以外の人々は、現在あの街のどこかに存在している。それには例外などないのだ。一つあるとすれば、それは高橋だけである。しかし、自分だけが脱してくると、今度は切ない気持ちになってくる。それは、まるで、街全体を敵にしたような気分である。そんな事を考え、高橋は鼻で笑った。

そんな時、高橋の携帯に着信があった。画面を見ると、相手はとうやら直子のものである。けれども、高橋は電話に出なかった。それは出るのが怖かったからでもなく、気まずかったからでもない。高橋の中で、直子はどう別の世界の人になってしまったのだ。だからといって電話を無視してよいという術はない。けれども、出なくてはならないという法もない。今、高橋が信じる事のできるものといえば、それは、自分以外には他ならないだろう。

高橋は、ポケットに手をつ突っ込んだ。そして、前よりもぐしゃぐしゃになった手紙を取り出した。この中には、自分の期待するものが入っているかもしれない。この手紙は、今の自分のこれからを決定付けるかもしれない。高橋は、一人でそんなことを思いながら、右手の中の手紙を見つめていた。

それから、高橋はゆっくりと手紙の封を切った。そして、中からはノートの切れ端がでてきた。筆跡を見る限り、伊藤本人が書いたものに間違いはなさそうである。やや丸みを帯びたその字からは、伊藤の優しさが伺える。高橋はその字を見ているだけで涙が溢れてきた。目からこぼれる大粒の涙は、手紙の上にぼつぼつと落ち、ボールペンで書かれた字をにじませた。

手紙の内容は、次の通りである。





## 第三十一話

三十一、

信ちゃんへ

この手紙を読んでいる頃には、俺は、もうこの世の人じゃないと思う。信ちゃんにはいろいろと迷惑をかけて、申し訳なかったと思ってる。できるものなら、今までのお礼をしたいところだけど、それもできない。お礼は、この手紙って事にしておいてくれ。

そもそも、俺がこんな風になってしまったのは、自分の弱さからだった。それだけならいいけど、親や友人にまで迷惑をかけてしまつて、今では本当に後悔している。病院のベットに寝ている間は、ずっとそんなことを考えていた。それで、ずっとぐじぐじしていたんだ。

でも、お前らがお見舞いに来てくれたりして、だんだんと前向きに頑張る気持ちになってきた。特に、お前は俺の話を何でも聞いてくれて、本当に心の支えになったよ。お前は、しっかりしているし、才能も豊かだ。だから、俺のことを気にせずに頑張つていつて欲しい。これは俺の本心さ。お前ならきつと強い人間になれると思う。そして、俺みたいな人間をつくらないようにして欲しい。

それから、これは、直子と二人で話した時に思った事なんだけど、お前と直子はお似合いのカップルだよ。お前は男女の仲について悩んでいたようだけど、それは直子も同じだよ。こんなことは、俺が偉そうに言う事じゃないけど、二人の仲は、二人で育てていくものだと思う。お前は、ついつい深く考えすぎる癖がある。それが裏目に出て、関係をぎこちなくするんだ。だから、深い事は考えずに、楽しむ事を考えてくれ。直子は、お前の事が好きだよ。あの様子なら、ちよつとやさつとじゃお前を見捨てないはずだ。なにせ、お

前らは俺が仲裁したんだからな。

以上のことは、俺からのお願いだ。別に守らなくてもいいけど、お前なら言わなくてもそうするだろうと信じてる。

最後に、俺が自分の命を絶とうと思ったのは、これ以上、周りの人々に迷惑を掛けなくなかったのと、お前にもっともつと成長して欲しかったからだ。お前は、ほぼ完璧な人間だが、一つだけ大きな欠点がある。お前もうすうす気付いていると思うが、それは、人間関係についてだ。

お前は、どんな人であろうと、人を警戒し過ぎる。傍から見れば仲が良さそうに見えても、お前は自分をオープンにしようとしなくて、人に深入りしようもしない。それが個性と言われればそれまでだが、人を信頼できるようになれば、お前はもっとすごい人間になれる。直子ともうまくいくと思う。そうなるのなら、俺のこのぼろぼろの体なんてどうなってもいい。俺には明るい未来なんてないからな。

けれど、最後の最後に、お前は一人だけ受け入れてくれた。勿論それは、この伊藤隆さ。最後まで、支えてくれてありがとう。これからは、新しい人生を歩んでいってくれ。縁があつたらあの世でまた会おう！

伊藤隆より

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5983c/>

---

傑点×欠点

2010年10月8日15時07分発行